

育教の兒幼

號 十 第 號 月 十 卷 十 三 第



內 校 學 範 師 等 高 子 女 京 東
會 協 園 稚 幼 南 日

成城小學校訓導

奧野庄太郎先生著

兒童圖書館用書

折角子供の爲にかゝれたグリムやアンデルセンの童話等も其翻譯や翻譯が雑話な爲結局大人の讀物となる事は誠に遺憾です童話は飽まで子供の知能、子供の情緒、子供の徳性を培ふ源泉たる筈です。

本童話新選は徹頭徹尾、子供の爲に用意された讀物で、極く平易な文章と用字で、特に子供と其一字一句にも子供を對象としての親切さが満ち溢れてゐます。小館は曩に世界著名の童話を紹介すべく學習室文庫を發刊し全國學校から多大の賞讃を得ましたが、本童話新選は右文庫中最も兒童に親炙せるもの數十篇宛を選び、優雅な装幀堅牢な美本として新に提供します。何卒各小學校、兒童圖書館並に一般家庭の御必備を希ひます。

東西幼年童話新選

梅の巻 尋常
櫻の巻 一年
菊の巻 二
楓の巻 三

東西童話新選

天の巻 尋常
地の巻 四年
人の巻 五
文の巻 六

各壹冊の定價と體裁
各卷 菊判 全一冊宛
各卷 總クロース洋綴
各卷 紙數 五百頁宛
各卷 插畫 四十宛
各卷 彩色畫 四葉
各卷 定價 二圓宛
各卷 送料 廿七錢宛

東京市牛込區 中野文館書店

東京東區 番七二四八三



育教の兒幼 輯編會協園稚幼本日

會長 東京女子高等師範學校長 吉岡郷甫

主幹 東京女子高等師範學校教授 堀七藏
 附屬幼稚園主事

日本幼稚園協會規則

- 第一條 本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
 - 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス
 - 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス
 - 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ
 - 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
 - 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルベシ
 - 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得
 - 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ
 - 一、幼兒教育ニ關スル研究及ビ調査
 - 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ビ講習會ノ開催
-
- 一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行
 - 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介
 - 一、其也本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事
- 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長 一名 會務ヲ總理ス
 - 主幹 一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ズ
 - 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
 - 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ヶ年ナリシテ會長ヨリ推舉スルモノトス
 - 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、トアルヘシ
 - 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレハ變更スルコトヲ得ズ

一、雜誌發行(毎月一回)



第三十卷 幼 兒 教 育 第 十 號

—(次 目)—

口 繪	秋 東京女子高等師範學校附屬幼稚園	堀 七 藏	(二)
幼兒の唱歌遊戲	堀 七 藏	(一〇)
兒童と教科課程	大塚喜一	(一九)
保育座談會——「觀察」について——	原 徹	(三一)
歐米に於ける學校給食の現状(承前)	氏 原 銀	(三七)
幼稚園に關する夏期講習會の所感	膳 眞規子	(四〇)
倉橋先生の本誌五月號に於て 保姆諸姉と園藝趣味」の記事を拜讀して	新庄よしこ	(四四)
葡 萄	山 崎 ひ さ	(四八)
臨海保育の所感	和 田 實	(五一)
園 外 保 育	小 野 直	(五五)
巴 里 便 り	金子彦三	(六二)
十月の特技指針	土 田 利 男	(六五)
あ は な し	大 岩 金	(六八)
不思議な栗、ボンボコ狸のボンボコボン	岡 田 美 津	(六八)
犬と猿が仲が悪くなつた話		
きれいなお知せ		
幸 吉 の 旅		

文學博士 富士川 游撰

児童乃教養

全一冊

菊判二百餘頁
多數圖畫挿入
正價金一圓七十錢
郵稅六錢

児童をば善く且つ強く又我々國民の要求に副ふやうに致養するには、現代の科學の知識に基きて合理的にこれを教養せねばならぬ。我が富士川博士を所長とせる中山児童教養研究所は深くこの點に鑑みるところがありて、児童教養に關する現代の科學的知識の普及を圖るために児童教養に關する通俗科學展覽會を開き、多數の表紀・圖畫・寫眞・標品等を蒐集し、これを總說、遺傳、發育、乳兒、幼兒、學齡期兒童、成熟期兒童、器官、榮養、衣服、住居、睡眠、疾病、異常兒童の部門に分ち、或はこれを内外諸家の論說に徴し、或はこれを自家經驗の所得に照し、その要を摘み、華を抜き展觀の便に供せられた。この書はその内より更に實際に緊要なりと認められるものを選びたるもので、まことに現代に於ける児童教養の科學的知識の精華を集めたるもので、多年の辛苦によりて始めて得らるべき知識が僅に數時間の間に得らるべき利益がある。世の母親たるもの、児童保護の任に當るもの及び児童教養の職にある方々のために最善の講本であることを信ずる。謹しみてこれを江湖に推獎する。

發行所

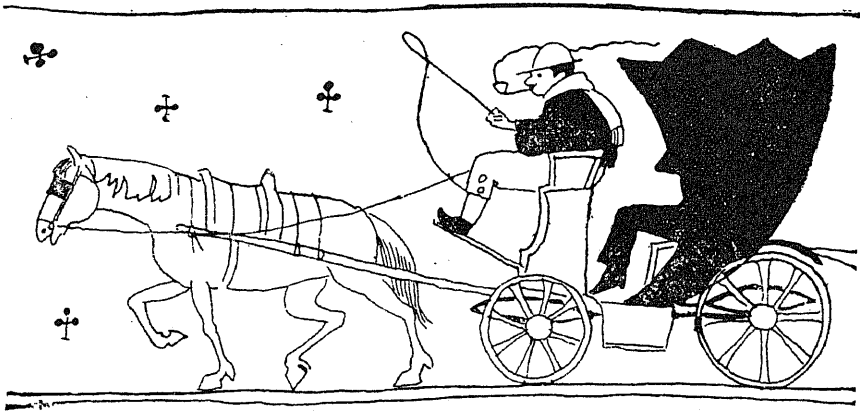
東京市本郷區本富士町二番地(電話小石川)
振替口座東京三一八一〇番(七七六七番)

養正書院



秋

(東京女子高等師範學校附屬幼稚園)



號十第 育教の兒幼 卷十三第

月十年五和昭

一、教育で家庭教育位重要なものはありませぬ。家庭教育の良否は實に人生を支配し國家の發展を左右するのであります。最近の學術は益々家庭教育の重大なる使命を立證し近時の社會現象は善良なる家庭教育の必要を痛感せしめてゐます。

一、家庭教育の短を補ひ幼兒の心身を充分に發達せしめ將來受くべき學校教育の基礎を築くものは幼稚園保育であります。幼稚園保育の重視すべきことは天下一人も異議がないのであります。

一、幼兒の教育は本邦唯一の幼稚園保育に関する發表機關であります。而してまた本邦唯一の家庭教育雜誌であります。

一、幼兒の教育は幼兒の教育、即ち家庭に於ける教育と幼稚園に於ける教育、更に小學校初學年教育に關する事項は細大となく網羅し、以て家庭教育の向上を計り、幼稚園保育の進歩發展を期する大抱負をもつて産れたもので有ります。

幼兒の唱歌遊戯

堀 七 藏

既に幼兒の運動遊戯に關して卑見を述べたから進んで唱歌遊戯についてこの愚見を述べることにする。私は勿論所謂遊戯について全くの素人であるから所説或は妥當を欠くことが多いかも知れない。只遊戯の専門家でない素人觀を述べるのが幼兒教育上非常に肝要である。幼稚園の遊戯は藝人を仕込んだり見物人を喜ばすことを目的とすべきものでないから、根本的に幼兒の教育的立場で幼稚園の唱歌遊戯に對する注文を提出したのである。

第一に幼稚園遊戯の振付創作をせられる方々に希望を述べたい。舞誦でも仕舞、またダンスでも誦でも、純藝術的立場で振付せられ創作せられることは勿論であらう。新しいもの、藝術的味たつぷりなものを發表して世間の喝采を博せられることも亦當然であらう。觀客の拍手を豫想して振付し創作し、所謂藝を賣ることも仕方がない。しかし幼稚園幼兒に行はせる唱歌遊戯は純藝術の外に求むべきものが必ずあるべきである。所謂幼兒教育の目的を達成する一方便として、幼稚園に行はれる遊戯として、舞臺に於て

觀衆相手に行はれる舞踊やそれに類似するものとは大に異なる點がなくてはならぬ。幼稚園の遊戯は幼稚園で幼児が行つて父兄を喜ばせる爲のものではない。また二三の幼児が行つて殘餘の幼児が傍觀するが如き性質のものでもない。勿論幼児の行ふ遊戯を賣物にして幼稚園の宣傳をしたり、保護者後援會などの寄附を募集するが如き手段となるべきものではない。どこまでも幼児全體が悉く遊戯して楽しく生活するその一内容をなすべきものである。凡ての幼児が多少努力しても、兎に角、遊戯し得る程度のものでなくてはならぬ。特別な幼児が遊戯して大人が何と可愛ゆいでせう、と感嘆させねばならぬことはない。私の子供はどこそで遊戯して拍手喝采せられました」と、その父母やその幼稚園の保姆の人々が得意を感じ名譽と心得るやうでなくてはならぬことは以ての外の注文である。幼稚園の遊戯はどの幼児でもその遊戯を行ふことによつて、その活動欲を満足し、身心を適當に發達進歩せしめるべきものでなくては教育的の遊戯といふことは出來ぬ。幼稚園の幼児は將來舞踊家にばかりなるものでもない。また越後獅子の小僧に勿論なるものでもない。仕舞の師匠になるものでもない。是等の藝人やそれを職業とする人が出るかも知れないが全體の幼児は悉くそれを目的にして遊戯すべきものではない。教育的立場を十分考量して幼稚園の遊戯を振付創作せねばならぬ。誰が幼児を藝人にするために遊戯の振付をするものか。舞踊家になすために遊戯を創作せぬ。無論全く教育的立場に於て遊戯の振付創作をする」と主張もし、また實行せられてゐることと私も信ずるものである。しかし幼稚園教育者として遊戯の振付創作を

せられる方に對し、今一層教育的立場を尊重して欲しい。純藝術としてよりも、教育的手段として遊戯を創作せられたい。満三歳や満四五歳の幼兒の喜んで出来る、楽しく生活出来る、幼兒の生活内容を構成し、しかも幼稚なる幼兒が身體も發達し精神も十分發育するやうな手段となる遊戯を振付創作をして欲しいのである。丁抹や英國などのカントリ・ダンスを焼直したり、我が國の盆踊の手をその儘組合せたのでは幼兒には適當しないではないか。少くとも大に發達せねばならぬ幼稚な幼兒、漸くよちよち歩み、碌にスキップも出来ない幼兒に、あまり精細な動作を注文するやうな遊戯では幼稚園の遊戯としては困る。純藝術的な遊戯としては非常に立派でも、幼稚園遊戯としては上乘でないことは分り切つた話である。幼兒は何の意味か大人にも分らぬ動作を多くするものである。といつても幼兒に何の意味も分らぬ大人の思想感情で大變意味深長な遊戯を無理に幼兒に當てがふことも全く感服出来ない。幼兒は只活動欲を満足する爲に遊戯をなすよりも、更にその遊戯のねらつてゐる思想感情の中にひたつて動作することが出来るやうでなければならぬ。只いや／＼眞似をしてゐるやうな遊戯は遊戯としての價值を半減することは明白である。それで遊戯の振付創作をする人は十分幼兒の動作を研究して頂かねばならぬ。

二

第二に幼稚園で遊戯を選択する保姆諸君に注文がある。誰でも輕業師が幼兒を打つたり擲つたりして藝を仕込むのを見ては幼兒に同情の念を禁じないであらう。如何に衣食の爲めとはいへ、頑是ない軟弱

な身體をしてゐる幼児に、無理／＼藝を仕込むことは誠に人道上等閑に附することの出来ない大問題といはねばならぬ。これと幼稚園の遊戯と比較することは以ての外ではあるが、幼児に不適當な一遊戯をいやでもやりなさい、「是非この遊戯をせねばなりません。これは何時どこで發表するのですから、そらしつかりやりなさい。その手の上げ方はいけない。もつとこんなになさい。あなたは下手だから誰さんのをちつと行儀よく見てゐるのです。」などと、幼稚園で幼児に不適當な遊戯を強制的に行はせるものがあるとするればどんなものか。發表するが爲めに新しい遊戯を無理に練習させるならば輕業師の弟子に藝を仕込むのと大差がなくなる。輕業師は藝を賣つて業とするもの、弟子の藝を見て見物をやんやいはせるものである。遊戯の發表で幼稚園の名を賣つたり保母の名譽を勝得んとするものがあればその動機に於て彼は大差がない。何れも幼児を大人の犠牲にする點に於ては同一である。寧ろ保育の美名の下に人の子を犠牲にする方が不道德であるといはねばならぬ。私は我が國の幼稚園に於てかゝる不徳義な遊戯が行はれてゐるとは毛頭信ずるものではない。しかも往々にして不用意に、何氣なく幼児に不適當な遊戯を行はせ、しかも發表のために無理な練習を行はせる場合が皆無てないと聞くのは甚だ遺憾である。成程幼児もうまく遊戯をなして大人にほめられるのを喜ぶ。母親でも父親でも自分の幼児がかはいらしい動作をして他人から喝采せられることを親心として喜ぶに相違ない。幼児がそれ／＼適當なる遊戯をなし、心身の順調な發達をし、それが併せて多くの人々から拍手せられるといふのならば結構である。發

表のため、幼稚園のために幼児を犠牲にしてもかまはぬといふ精神で遊戯を行はせるならばそれは大變な誤である。本末轉倒であるのである。

私は茲に最も極端なる不適當な遊戯を幼児に強要することが教育上に實に三省せねばならぬと考へるが故に述べたのである。それでこんな極端な場合が起る筈がないまでも、幼稚園の唱歌遊戯を選定するに當つてはどこまでも教育的に立脚し、幼児に適當なるものを採用せねばならぬ。大人が面白いもの決して幼児に適當とはいへぬ。新しいもの必ずしも幼児に喜ばれる譯ではない。教師には大變古い遊戯でも幼児には新奇である。またどんなに古く數回數十回幼児が繰返しても決してあきない遊戯こそ幼稚園に於て行はねばならぬ最良の唱歌遊戯である。保姆が新しい遊戯を追ふために遊戯の創作者もつゝ人氣を得んとして無理な創作が行はれるといふ傾向が今日多くはあるまいか。幼児に適當な話はくり返す程幼児は喜ぶものである。幼児に適する良い遊戯も亦幾度も幾度も繰返す程、幼児は生活化し眞に幼児のものとして幼児は活動するものである。幼稚園にて行はれる遊戯は恰も算術に於ける二十以下の加減乗除の如く基礎的なものでなくてはならぬ。何時でも何處でも必ず行はねばならずまたそれによつて幼児の心身の發達を促進する階梯をなすものでなくてはならぬ。従つて遊戯の數多きよりも少數の遊戯を精選せねばならぬ。新奇なる遊戯を求めるよりも、幼児の發達に適當なるものでなくてはならぬ。歩行すること、走ることが凡ての競走の基本であるが如く、發達の幼稚なる幼児に基本的運動を愉快に行ふこ

とが出来たるやうな遊戯を精選して幼児の生活に編込まねばならぬ。所謂手の舞ひ足の踏む所を知らぬといつた状態で幼児が生活化することが出来る遊戯を選定することが肝要である。

三

眞に適當なる遊戯を精選すべきことは理想であり、是非之が實現を期せねばならぬ。しかも今日幼稚園に於て行はれる遊戯は悉く理想的なものとはいへぬ。満四歳の幼児といつても四月生の幼児と翌年三月生の幼児とは正に一ケ年の年齢差がある。四歳に於て一ケ年の年齢差を持つてゐる幼児、従つて身體の發育年齢にも大差があり、精神發育年齢にも著しい相違がある。それ等の幼児を三十人なり四十人なり一團として行はせる唱歌遊戯が果して凡ての幼児の觀迎するところとも考へられぬ。また至極適當なる遊戯と銘打つことも困難である。大體を標準として適當なるもの、成るべく多くの幼児に適するものを選定するより外ない。従つて幼稚園にて行ふ唱歌遊戯は悉くの幼児が喜んで行ふものともいはれぬ。甲の幼児には至極愉快に行はれるものでも、他の幼児には何等の感興も起らず進んで遊戯しようと思ふ場合が實際屢々起るのは事實である。

精選した遊戯豫定した遊戯であるから成るべく凡ての幼児に行はせるがよい。けれどもいやがる子供を無理強に遊戯させねばならぬことはない。成るべくならば凡ての幼児が喜んで遊戯するやうに仕向けることは保育上至極結構なことであるが、どうしても遊戯をいやがつてせぬ幼児があればそれに遊戯の

強要をなすことは無理である。幼児の中には往々遊戯を好まぬ者がある。その原因にはいろいろあらう。人に見られるのが恥しいといふものもあれば、あんな女のやうなことをするのがいやだといふ男兒もある。かけつこならば面白いが唱歌遊戯は面白くないから行はぬといふものもある。いろいろの理由があつても、幼児のことであるから「どうしてもいやだ」といやだ／＼の一點張で遊戯をせぬものが五十人の内に一人や二人はゐる。こんな子供が一人や二人ゐると、「どうもあの兒は強情で困まる。どうしても遊戯せぬ。どうすればよいか」と、天下の一大事なるが如く心配する方がある。誠に尤もな次第で三人なり四十人なりの幼児中に遊戯に加はらぬものがあると、大變都合が悪いかも知れない。しかもそれは保姆の都合や便宜のことで、幼兒保育上左程大問題ではない。遊戯をせぬとて幼兒は遊ばぬ譯ではない。「葱がさらひだから食はぬ」といふ幼兒をつかまへて「いやでも何でも食はねばならぬ」と強要する必要がある。これと同様に「雀の學校」の遊戯をせぬからとて叱つたりおどしたりすることは甚だ教育的ではない。幼兒のすきな遊びを行はせて、次第に遊戯の方へ引込む工夫をすればよい。無理にさせようとすればこそ尙更いやになる場合が少くない。「いやなものを見てお出なさい」といふ態度で、すきな幼兒だけに遊戯を行はせるがよい。すると模倣性に富む幼兒のことであるから不知／＼手を動かし足を動かして、何時とはなしに團體遊戯をなすやうになるものである。

またどうしても唱歌遊戯をしない幼兒には他の遊びなり手技なりをさせて置けばよい。その日の氣分

で遊戯がいやだといふならば何も強いて遊戯をさせねばならぬことはない。遊戯をさせねば保育が出来ないが如く考へることは以ての外である。幼稚園令に保育項目は遊戯唱歌觀察話手技等とすとあつてもその遊戯は所謂唱歌遊戯だけではない。廣く幼兒の遊び全體と解して一向差支ない。僅かに唱歌遊戯をせぬとて左程苦にすることはないのである。幼稚園に入園當初どうにも泣いて親から離れぬ幼兒でも一月たゝぬ中には悉く皆幼兒同志遊ぶやうになる。二三回遊戯に加はることを肯せぬ幼兒でも何時とはなしに皆遊戯を好むやうになる。只眞正面から「そらやりなさい。どうしでも遊戯しないと叱りますよ」などとあどしたり叱つたりすることは大に慎まねばならぬ。そして愉快に幼兒の理解し容易に遊戯し得る如きものを選ばねばならぬ。

保育講演會開催豫告

期日 來十一月十五日(土)午後一時より

同四時まで

講演 哲學的人間學と幼稚園教育

東京文理科大學教授 文學博士 檜崎淺太郎先生

歐米の幼稚園教育と小學校低學年教

育

東京市昭和小學校長 服部蕪先生

會場 東京女子高等師範學校附屬幼稚園遊

戲室

會費 無料。幼稚園保育關係者の多數御來

聽を歓迎いたします。會場の都合に

より御聽講希望者の氏名員數を豫め

御申込下されたい。

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

日本幼稚園協會

昭和五年十月

兒童と教科課程 (四)

デユキ一著
大塚喜一譯

吾人が初に記せし如き、兒童と教科課程とを互に相對立せしむる様な二様の見方を學科の主題に就て心に抱く事は失敗である。主題は、科學者の側から見れば、子供の現在の經驗に直接關係を持たない。主題は子供の經驗外に獨立せるものである。斯く考ふる事の危險は單に理論的のもののみではない。我等は實際的にあらゆる方面より脅かされる。教科書と教師とは、兒童に主題を提出するに際して各々其専門の立場より（註、教科書は教科課程本位に、教師は兒童本位に）互に相争ふ。此際主題が受くる修飾や訂正は、或る科學的困難の單なる除去であり且より低き智的水準へ一般的に歸納せしむる事に過ぎない。教材は、生活の言葉として翻譯せられたのではなくて、子供の現在の生活の代用物としてか或は附屬物として其儘に提示せられたのである。

斯かる結果として、次の如き三様の弊害を招來する。

第一に、子供が既に見、感じ、愛せるものと何等の有機的結合をも持たぬ教材は、全く形式的に象徴的なものとなつてしまふ。或考方によれば、形式及象徴は如何程にても高く見積り得る價值を有するも

のである。眞正の形式、眞の象徴なるものは、眞理の確認と發見との方法として役立つものである。等は個人が最も確實に且廣汎に未開の領域に進出せんとする際の武器となる。又、是等は彼が過去の探索に於て獲得せる所のものを繼承して之を將來に向つて利用すべき手段である。しかも斯かる効用は、象徴が眞に象徴としての意義を有する時にのみ、即ちそれが、個人が既に經過して來た實際の諸經驗を速記的に概括し且代表する時にのみ實現せられるものである。之に反し、外から提出されたる、最初の諸活動中に迄導き入れられてゐない象徴は、吾人の言を以てすれば裸の又はただの象徴である。それは死せる且空なるものである。扱て、或る事項は、算術地理文法等の何れにせよ、それが子供の生活の中に於てそれだけの爲に（他の間接的興味等に依らずして）或る意味ある位置を以前に占有した事のある何物かに導かれ且それより抽出せられたるものでなければ、其事項は斯かる死せる象徴と同列に墮せざるを得ない。それは實在ではない、只或諸條件が完成されるれば經驗されるであらうにと想定せらるゝ所の實在の記號となつてゐる。但、是等の諸條件は、他人の知れる何物かの如き事項を突然提示して兒童に之を學習すべく要求するのみにては滿されない。斯の如きは恰も該事項を或る象形文字として取扱ふが如く、若し人が之を解くべき鍵を有する際にのみ何等かの意味を有するであらう。此手掛り無かりせば、そは只心を蝕み且邪魔する所の死せる過重となるべき無駄な好奇心を残すのみである。

此外的提示の第二の害は動機化の缺乏である。如何なる事項や眞理と雖も、何等既有の知識經驗等に

關係無くして)全然新しきものを我物にし且同化すと豫め感ぜらるゝ如きものは無いと同様に、希求や必要や慾望等も亦或動機を、かけ橋として既知より未知に向ふものである。されば、主題を心理學的に見たる時即ち現在の諸傾向や諸活動の成果として之を見たる時は、問題となれる眞理を體得すれば一層適切に取扱はれ得る所の或る障礙を(知的・實際的・倫理的の何れにもせよ)現在に配置するは容易である。此必要は學習に對する動機を供給する。兒童自身の目指す目的は彼をして其達成の手段を獲得すべき道を行かしむ。之に反し、若し教材が單に學ぶべき學科としての外的形式にて直に提示されむか、欲求や目標の結帶環を缺ける事は明瞭である。我等が教授の際の「機械的」又は「死せる」等といふ所の缺陷は、動機と與ふる事を斯く缺けるが爲の結果である。(この缺陷が救濟されたる時)有機的といひ生命ありと云ふは相互作用の意味である——そは精神的要求と素材の供給とを相助的に活躍せしむるの謂である。

第三の害は、最も論理的な様式に整理されたる最も科學的な事項に於てさへ、それを子供に與ふる場合に外的な既製の様式にて提示したのでは其長所をも失ふといふ事である。餘りに難解にして把握されぬ或る方面を排除し且或る隨伴的困難を歸納するが爲には、科學的事項も亦或る修飾を受けねばならぬ。其結果どうなるか？ 科學者にとつて最も意義ある所のものや實際の考究及分類の論理に於て最も價値ある所のもの落ちてしまふ。眞に思考を惹起する特質は曖昧にせられ、有機的に働く機能は消滅する。或は我等が普通に云ふが如く、推理力や抽象や一般化の才能は充分に發達せしめられてはゐない。

それ故、主題は其論理的價値に於て空にせられ、且それが論理的立場より見て意義を有するものであるが、「記憶」に對しては只の材料として現はるゝのみである。此事は矛盾を示す、即ち子供は大人の論理的形成からも又彼が先天的に有せる理解と適應との力能からも何等の利益を得ない事となる。斯くては子供の論法は足枷せられ制御せられるのである。

そうして一二世紀以前に科學的生命を得つゝあつた所のもの今は無味平凡なる殘骸となれるもの、詳言すれば遠き以前の人々が或時嘗て經驗した所のものに基いて或他の人が嘗て形成せる所のもの、減弱せる回想、つまり實際に科學ではないものを子供が得てゐなければ我々は寧ろ僥倖といふべきではあるまいか。(斯かる弊害の可能性あり)

上述の諸弊害の連續は尙止まない。誤れる諸學説が互に相反するに當り、反對者の手中に突進するはよくある通弊である。心理學的考察なるものは、或る一方面に於ては輕視される事も推退けられる事もあらうが、全然之を押出す事は(思考の必然上)不可能である。之を戸の外に投出せば窓より歸つて來る。心と其材料との間には何とかして且何處かで動機が訴へられ結合が造られざるを得ない。此結合を無からしむといふ事は問題にはならない。(物心の結合無ければ思考は成立せず)問題となるは只其結合が材料自身の中より心への關係に於て出來たものか又は他の外的起源から課せられたものかといふ事である。若し諸學課の主題が兒童の擴張しつゝある意識の中に適當の位置を有するが如きものならば、若

しそれが彼自身の過去の行爲や思考から産れ出てそれ以上の達成と受納力との應用の中へと成長するならば、然らば所謂「興味」を起しめむが爲に何等方法上の工夫や技巧に頼るの要はない。心理學的に見るとは興味の問題である。興味(關心)はそれが其生活の價値を分有する様な工合に意識生活の全體の中に置かれてゐる。之に反し、外的に提示されたる材料即ち子供に縁遠き立場と態度の中に考へられ發生し彼に反對の動機の中に發展したものはそれ自身斯かる位置を有しない。故に材料を子供に押付けんが爲に冒險的な挺の作用や、追ひ込まんが爲の虚構の練習や、誘餌せんが爲の賄賂等に頼らねばならなくなる。

主題に何等かの心理學的意味を與へんが爲に、斯く三様の外的方途に依頼する事は、茲に言ふ價値があらう。親しみは現狀不滿を感じしむるが又何か愛情に似たるものを起さしめる。我等は平常用ひ馴れてゐる鎖も之を取外せば失ふに至る。最初は恐ろしき顔色をなせるものも風習に依て遂には之を抱くに至るは昔話に語られる所である。無意味なるが故に不愉快に感ぜられてゐた諸活動も、若し充分に永く之を固執するならば好適のものとならう。おさまりの又は機械的な行動に於ても、斯かる作用の様式を要求し且其他のすべての種類のものを除く様に諸條件が絶えず與へらるゝならば心に興味を起さしむる事が出来る。愚鈍なる手段や空虚なる練習が「子供が是等の中に斯様なる「興味」を有する」の故を以て抗辯せられ讚美せらるゝを、余は屢々耳にした。然り、これは最悪の場合である。心は、價値ある働

きより閉め出され好適なる遂行の味を失ふて、斯くて尙漸く知り且爲すべく残されたるレベルまで下落し、幽閉され束縛されたる経験の中に無理に興味を見出してゐるのである。

練習、それ、自體に満足を見出す事は心の正常法である。而して若し大なる意義多き仕事を爲す事を拒めば、心は其後に残されたる形式的な諸行動に自ら満足せんと試みる——而して此事が餘りに履々續けば、只斯かる諸行動に適應するを得ざる更に熱心なる活動が起らざる限り、我等の學校の成果に氣儘な規則な影響を及ぼすものである。象徴の形式的な理解力と其記憶の再生とに於ける興味なるものは、多くの生徒に於ては實在に於ける原本的にして生命潑濶たる興味に對する代用物となる。而して是等すべての結果、學習の課程の主題が個人の具體的な心への關係外に存するが故に、之を或種の働さに依て心へ關係付けるべき何等かの置換帶（つながり）が発見され骨折つて仕上げられねばならぬ。（註、心と其材料との間に何等かの結合がなければ其材料に對して心が働か様が無い旨を述べたる前説を想起せよ）

主題を働機化せんが爲めの今一つの代用物は對照効果のそれである。課業の材料は、若しそれ自身に興味がなければ、少くとも何か之に代るべき經驗との對照に於て興味あらしむるを得る。例へば學科を學ぶ事は、叱られたり、一般の嘲笑を買つたり、放課後残されたり、悪い點を附けられたり、又は落第させられたりするよりは増しである。而して、「訓練」の名に於て行はるゝ多くの事や軟教育の教義に反對して努力と義務との旗幟を掲ぐる事の自慢も、諸種の身體的社會的個人的の苦痛を恐れ嫌ふのを利用

して所謂「興味」の皮相なる姿に訴ふる事に於て何等の優劣もない。斯かる方法に於ては主題は心に訴ふる所も無く又訴へ得まい。それは成長しつゝある經驗の中に其起源と位置とを有してゐない。それ故この訴は外的な千に一位の殆ど無關係な働きであつて、それは全くの反抗と反撥とにより、心が絶えず遠ざからむとしてさまよふてゐた材料を心に再び投げ付けるの用を爲すであらう。

人間性、實に性なればこそ、不愉快よりも愉快に、交替に苦痛を招くものよりも直接の快樂に其働機化を求むる傾向がある。而してそれ故に「興味」といふ語の偽の意味に近代の學説及實際が導かるゝに至つた。教材は、それ自身の特質に就て論ずれば、正に外的に選擇され形成されたるまゝに残されてゐる。それは地理・算術・文法に於て正に然りであつて、斯くては土地や言語や數量的實在に就ての兒童經驗の可能性は開發せられてはゐない。故に心を主題に引付けて置く事が困難となり、注意が散漫となる傾向を生ずる、何となれば他の諸行為や諸心象が心に雲集して學課を放逐するからである。此際正當な道は教材を變形する事である。即ち之を心理學的見地より見ることを詳言すればもう一度之を兒童生活の領域内に見出し且發展せしむる事である。しかし此事よりも、教材を其儘に殘して置いて他の方法の奸策によりて興味を呼起し、之を興味あらしめる事の方容易であり簡單である。これを比喻を以て云へば、教材の無趣味なる事を中間的な無關係なる材料を以て隠す事恰も之を砂糖の衣を以て蔽ふが如くにし、子供が全く非本質的なる味を享樂する間に其まづき一片を嚙下し消化するに至らしむるのである。

しかし遺憾ながら此類推は當らない。精神的同化は意識に起る事項であつて、若し注意が實際の教材の上に働いてゐたのでなければ其教材は理解されてゐたのでは無く又子供の才能の中へと働きかけてもゐない。

結 論

然らば、兒童對教科課程の場合如何になるか。其判決は如何？ 我々が出立せし最初の原告被告の申立書に於ける根本的な誤謬は、子供を彼自身の無指導な自發に放任するかさもなければ外から彼に方向を指示するかの二途以外に選ぶべき道はないとの推察である。行爲は應答である。それは順應であり調整である。純粹の自己活動なるものは事實存在しない、何となればあらゆる活動は或る媒質に於て地位に於て且其諸條件に關係して起るものであるから。而して又一方、外から或る眞理を提出し又は挿入するが如き事も事實不可能である。總ての事は、心自身が外から提示せられた所のものに感應する際に受くる活動性に依存する。扱て、學習の課程を形成する所の知識の簡潔に述べられたる財貨の價值は、それが教育者をして兒童の環境を決定するを得しめ斯くして間接的なるものに依て指導するを得しむる所に存する。其最初の價值や最初の指示は教師に對するものであつて兒童に對するものではない。

それは教師に對して曰く「斯様々々のものが眞理と美と行爲とに於て此子供達に向つて開かれたる諸能力であり諸達成である」と。今や一日一日と狀況は兒童自身の諸活動を此方向に向つて彼等自身の斯

かる終極の達成へと不可避に動きつゝある事を見よ。科學や藝術や實業の何れにせよ、それが現今世界の趨勢として卿に啓示さるゝ所より要求せらるゝ兒童天性の發育が向ふべき運命を完成せしめよ。

次に子供の場合を述べやう。此際、自ら主張さるべきものは彼の現在の權利であり、練習さるべきものは彼の現在の受容力であり、實現せらるべきものは彼の現在の態度である。(註、子供の教育が完全ならば彼の現在の年齢に於て是等の諸條件が十分に活躍する。我等は現在存在せる子供の状態を斯かる當に然るべき理想に迄導かねばならぬ。)しかし、我々が教科課程と呼べるそのものゝ中に體現せられたる所の種族の經驗を教師が賢明に徹底的に知るにあらざれば、教師は子供の現在の權利や受容力や態度が如何なるものなるかを知らず、又如何にして是等のものが主張せられ練習せられ實現らせるべきかをも知らないであらう。(完)

本稿前回(一)及(二)の題「兒童と教科過程」は「教科課程」の誤につき訂正いたします。

モンテツソリー法の講習會

來春一月から六月迄、イタリイローマ市にモンテツソリー女史の感覺練習法の講習會が開催される。講習科 三五〇圓。

保育座談會

「觀察」について――

時 日、九月十八日午後三時より。

場 所、東京女子高等師範學校附屬幼稚園。

出席者、倉橋教授、堀主事、及川、新庄、菊

池、徳久、白根、村上、神原保姆。

神原 今日は「觀察」に就いて話をお願いします。最初

に――これ迄に度々御意見は何つては居ります

が――「觀察」は如何ように扱ふべきか、を仰つて下さい。

倉橋 堀さんの領分だよ。「觀察」の扱ひ方はまだまだ問題になつて居るね。

堀 「觀察」の爲め時間を特設してゐるからその材料をきめんけりやならない。それで教案を作つ

たりして居る。

倉橋 觀察要目などを作つて居るのが、觀せる物で許り定つて居る。そして教育としての觀察がその物の何處に、何ういふ風に發輝されるかを明らかにしてゐない。材料なしでは觀察出來ぬが、物を用意するだけで「觀察」とするのは。

堀 本當をいへば、觀察の精神が分つて居らないんだよ。

倉橋 さうだよ。小學校令の理科教授要旨には自然物……」

堀 それはね通常の天然物及自然の現象に關する知識の一斑を得しめそれ等相互並に人生との關

係を理解せしめ兼ねて観察を精密にし自然を愛するの心を養ふを以て要旨とすといふのです。

倉橋「兼ネテ……」からをよく知つてゐるんだ。兼

ネテ観察ヲ精密ニシ自然ヲ愛スルコトヲ……」

この後の事項が幼稚園での本體になるんだ。始めの事項無くして後の事は出来得ない。だから手段としてやるのである。學校と幼稚園との違ひは後と前のエンフアサイズの置き方の違ひである。「ソノ観察ヲ精密ニシ」はまた細かに考究の必要はある。理想的に云へば、幼兒の持つ觀察的興味の範圍、程度が研究されると其處から計畫が立つね。

堀 それが研究されないし、小學校の理科の頭があるから、手つとり早く、材料で定めてしまふ。

倉橋 觀察の要目を並べる時に、うまい工夫はないかね。觀察方法とか、目的の論の方から、材料が主でない並べ方は出来ないかね。

堀 ところが、物でなく、原理で要目をあげてよくと、觀察を抜きにして説明に落ちる事が起る。

倉橋 原理つて、目的でせう。

「物に、堅い物、軟いもの、甘いもの、酸っぱいものあり」といふことを経験させたいといふ風に要目が出来て居たら、悪くすれば「これはあまいでせう」と文學的にしてしまふが、物を持ち出せば觀察の時間を特設しても、逆にはあやまりはない。特設の時間をとるからあやまりが出るので特設しないぶんにはあやまりがすくない。不用意の中に用意あれだからむつかしいよ。

堀 目的を擧げるのは小學校では失敗して居る。

果物の種子は種族繁殖のために散布する事を教へるのに、風で散布するもの、動物に食べられて散布するものには何々と小學校令の前段を中心にしておくのだが、葡萄の種は……と云つても味をみさせるでもない。そして甘いですか、

酸っぱい感じがしませんか、云つて御らんなさ
いといふ風になりがちです。

倉橋 モンテッソリ、女史の感覺練習のための工夫
は、心理學的立場から入つたものですが、感覺
練習に都合のよい状況をこしらへた點を離れる
と一種の觀察だ、あの特別なものに持つて行か
ないで、知覺の範圍におけばね。

堀 特別のものを使はないで、八つ手や朝顔の葉
を撫でさせるといふ風なのでいゝんだ。同じ葉
でも裏と表とでは違ふ、色彩感覺にもなる。覺
えておきなさ」といふのでは觀察は死んでし
まふんだが、感覺器關を働かせば練習になる。
何にでも感覺器關を働らかして遊ばせれば澤山
だと思ふ。大人の知識を授けようとするから自
然觀察でなくなつてしまふ。風車を材料として
斯々の物を觀察せしむぢやない、風車をこしら
へさせそれで遊ばせれば、それで風車の働さが

分る、體驗にもなる。

倉橋 其處だ、實際をやられる時に、物で定めた案
があるとなんな事になる恐れがある、理論は分
つて居る。物を出して要目を作るから知識化す
る。

堀 目的で要目を作ると却つて——

倉橋 觀察の用意としては、物を持つて來なくちや
ならん。たゞ苦になるのは觀念教育になる、知
識化することを恐れる。

堀 そこで實際家諸君は如何やつてるの。

及川 何かにくつつけてやつて居ります。ことさら
に觀察らしくやる觀察はあまりする時がありま
せんね。

堀 何だつて。

及川 物が子供の中に入ると單なる觀察だけではな
くなると思ひます。

倉橋 だから寫生してる時は觀察が一番出來てる、

描くとなれば自己訂正も行はれる。

及川 観察の意味の入つた寫生だからといつても「斯うしなさい」と云はなくても良いと思ひます。例へば朝顔の葉が三つに分れてゐるのは幼児にはよく會得出來てゐても繪としてかきあらはす事の出來ない子供があるのですから、それでよいと思ひます。

堀 技術の方で出來ないと、氣がつかなくて出來ないのがある、それは先生の方で一寸注意する。観察は畫だけではいけない、動作にも、味にも出せる。

及川 參觀の方々からよく尋ねられますと、私は、観察だけ別に取り出してやつてはゐないと申すんです、堀先生に濟まないんですが、やつてゐませんもの。

堀 すまなくないよ。観察をやつてゐないんぢやない。朝顔を剪り紙するのは手技から見れば、

剪り紙だが、自分でやつて居る子供には觀察になつて居る。象の模型を觀ながら粘土をするのはやはり觀察だ。世間の人は觀察は自然物に限つて、動物・植物の知識を授けるものとしてゐるが、私は觀察は凡べてに含まつてゐると思ふ。記憶畫とか談話は別だが、觀察を離れた寫生は存在せぬ。

及川 觀察の項目などは、何々をしました、と後から拾ひあげられるのが本當ぢやないでせうか。

堀 さういふ場合もあらうけれど。

手技、遊戯と同様に觀察材料はこれ／＼ときめるので無理がくる。

倉橋 つまり、幼稚園で實際としては、保育項目中にある他の生活様式を表す言葉と違ひ、教育目的の言葉だから、目的に到達するには種んな場合がある。觀察を生活中の位置から見ると三つの場合がある。全くの自在の中に觀察した場合、

これには機會捕捉でやる。二は、子供は活動本位で、見たい、描きたいが先に出る場合がある。ところでこの時は當然觀察が行はれる。この二つだけで満足出來ようか。立案して觀察させる必要はないとする場合は、第三の案を立てずとも隨意に觀察させ得る自信と第二の場合の自信があれば差支へない。子供は自らの生活の中で觀て居ります。が物に即して居る方の態度は極く大まかなものです。製作の方だつて、表現活動が主になると非藝術的になるから、觀察のための或る方案を必要としないでせうか。狭い意味の場合です。

及川 材料が珍らしい時にはみせたいと思ひます。

倉橋 その方案を立てる場合を分けると、特殊な見物、尾長鳥とか、蟻の巢とか、物の方から機會を捕へる必要あるものゝ外に、もつと觀察を觀察らしく發展させる方が必要ではないか。生活

や表現の中だけでは物足りないといふものが。及川 そんなものがあるでせうか。珍らしくないので。

堀 みなれた物を正確にみせとく必要がある。

倉橋 割註を、正確にみせておかねばならぬのは、物の方の要求としないで、子供の生活上からと。

及川 ボーンとして觀せるべきものをみのがせて濟んで來ましたのね。

倉橋 根本は、一體全體、表現主義の人、藝術家、僕のような興味本位でゆく人と、細かに觀る性質の人と、經驗する人で違ふ。理學者のお父さんなら、一寸來いと呼びつけては觀察のための觀察をさせるでせう。

堀 ある程度迄は、その方を發達させて來なくちやならなかつた。物を正確に觀るといふ態度、習慣、能力が出來て來なけりやいけない。何時でも藝術家はだ、或は觀察専門家はだになつて

も困る。それ許りに押し進んでゆくのではかたよつてしまふ。

及川 すべき物をしないで來た氣もするし、しなくともよいような氣持もあります。

堀 詩人的傾向の子供には、もつと科學的にしてやらなくちや。又こちらの子供は自然科學者風だから伸してやらなけりやと考へる。

及川 これは何うしても見せてやりたいといふ風に仰つていたどきたい。

堀 物によつていふのではない。

及川 觀せるのぢやなくて。

新庄 觀ない子供には何うすればいゝでせう。

堀 外からの刺戟の強いものを眼前に提出するか
幼兒の好奇心をそゝるものを提出するか等して
成るべく事物を觀る習慣をつけねばなりません。
ね。

及川 葡萄を描きなさいといはれれば、そのために

觀る、それでよろしいんぢやないでせうか。

堀 觀るために觀るのと、み方が違ふ。

倉橋 先の、第三の場合が、どうも必要です。それをやる中で、何處までやるかむづかしいです。ね。そこが保育方法の研究を待つ所。

及川 子供の力と先生の力ですわね。

倉橋 さうなりますわね（及川保母の思ひ入れに合
鍵を。一同笑、）

堀 子供の力を本體とす可きだ。子供の感覺器官に訴へて、自身に經驗させる。子供のいやがるものはいけない。觀察の時は先生は無言であるくらゐでなくちやいけない。先生は材料を提供して、觀察し易いように子供をし向けてやり、多少の導きを以て注意を集めてやる程度でいい。
及川 無言ですけれど、少しは解剖しなくちやなりませんね。

倉橋 其處に疑問が出るんだ。假りに葡萄の觀察を

するときには、勿論食べたいが一番だけれども、先生の方で、果物にいろんな形があることに注意を促したいために先に食べさせるとなく、観察要點の指導はいらんかね。

堀　こと／＼しい観察要點の指導はいらんかね。

倉橋　目の前において暫くお預けか。

堀　科學的心理的に云へば食ひたいが先です。此處を特に観察させたいとねらつて居る時は先生が引つ張らなくちや。

倉橋　葡萄を食べる時の観察。みせようと思ふために食べさせた。食べるといふ經驗を観察させる時に、何處に力點を置きますかね。おもしろいのでせうの間に對しては、あいまい、おぼろげなりとも「おもしろい」だけでは主觀の言葉だ、もつと客觀化された答がなくちや。

及川　小學校風にいへば、整理してやるんですね。倉橋　うまかつたね。何んな味でした？　つていへ

ば観察になつて来る。この點をはつきりすれば、幼稚園で何處迄、観察するかが具體的になる。

堀　一つ實驗しなさいよ。

(先刻來一同の圍む卓上に葡萄が具へられてある、話中に上つたわけ。實驗とはこの葡萄を味ふこと)

及川　ぢや皆さん、堀先生に整理していただきます。

(こゝ暫く實驗中)

及川　動植物についてはいろ／＼扱へますけど、人事的方面は殆んど観察だけです。

倉橋　さう。つまり、子供は人事物は用途が興味を中心だから。動きが主になりますからね。カナ、鋸など大工と一緒に居ないのぢやないが、仕事に興味が集つて居るせいで分らない。話が廣がるから葡萄でやらう。

倉橋 食べてみて、酸っぱかったと云へるだらうか。

堀 甘いと云ふね。酸っぱいはいへない。

倉橋 複合の味はいへない。葡萄が甘いと云つた時に、さうといつて、砂糖をなめさせる必要ありとはしないかね。そして比較による経験を反省させる。

堀 小學校でやつて居る。むつかしい。

倉橋 問題は、ナールホド違ふ、の感じをどこ迄言はせるか。砂糖をなめつ放していゝものだらうか。

堀 違ひは分る。

倉橋 違ひが分りやいゝ。

及川 違ふといへぬかも知れぬ。

堀 食べた時に、まだ注意させることがある。

及川 幼稚園で葡萄の種を吞んで來たつて事になりますよ。

倉橋 種なし葡萄さ。

堀 本當に葡萄を食べさすといふぢやなしさ。葡萄は柿と何處か違ふ、皮とぬる／＼の間にうま

い汁がある。ぬる／＼で種が包まれてゐる。子供は、まだ種とぬる／＼とが分けられない。

倉橋 種、そこからはいゝことにして、その次に思ふのは折角食べた。其處で、僕は、食べたといふそれまでの交渉をして來たんだから、恰好は何うでせう」とさいてよいと思ふが。

堀 いゝさ。

倉橋 これを、お預けしといて先に聞くのは。

堀 それが先に僕の言つた心理的順序よ。

倉橋 西洋の昔の幼稚園では、目をつぶつて、種んなドロップを食べさせて名をいはせる味覺練習がある。これと重大な差別は、實物を使つて居ない。觀察は何といつても、感覺經驗から入つて行かなければならぬが、實物感を離れぬようにならなくてはならぬ。こんな細かい注意を考へ

て行けば、多少の特定の時間はあつてもよいらしい。

堀 特定の時間をやらうか。白根さんの組あたりでやつてみようかね。小學校の一年生でやつて骨が折れた。

倉橋 それで、特定の時間がむつかしいで思ひ出したが、特定方案でやらなくちやならぬのは、先生の方案なので、明日これをするとならば、四五日前から子供の眼に觸れるように出して置く。ある所迄は生活觀察になつてゐるものを特定にする。注意はちどろきと共に發生する、とて、ソラー！と覆ひを外すのは……………

堀 それが「猫と鼠」さ、(堀主事の「猫と鼠」の話は今年の文部省の講習にお出席の方はちきと及びでせう)

倉橋 この夏の講習で話して皮肉だといはれたが、クモの觀察をさせたいなら一週間許り掃除をし

ないであくとクモが巢を張る。そして子供に豫め觀察させて、その凝集した頃に特定觀察を行ふとよい。特に工夫しなくても日常知つて居る物を使へばさうなつて居るんだけれど。むつかしいのは、更めてやれば「知つてら——」をいはれる事だ。何の本には斯うなると書いてあると子供とけんくわしちやいけない。

堀 その時に子供の知らない方面に注意を向ければ澤山。子供の一つ上手うまに出て、觀察しなければならんようにしむける。

倉橋 何時か出た話のように、牛にまゆげがあるのは氣がついて居ないからね。僕などには何うしてくもの巢が張られるものか分らない。

堀 お腹のいぼから糸が出る、脚で縦糸にくつつけて行く。

倉橋 みて分るものなの？ でなくちや云つちやいけない。

堀 五歳の子供、六歳の子供の観る程度で云ふこと。

村上 子供が蟻の巢をぞつとみて居る時に口を出してよろしいものでせうか。

倉橋 何處に興味を持つて居るかが分つてればいい。實際としては先生が興味を持つてやる、一緒にみてやる。

及川 蟻の巢はつきませんが、机上の一匹は見つめて居りますね。

堀 僕は、その時先生は、文句をいふべきでないと思ふ。又言ひようもない。

倉橋 そこが前に返つて、蟻をみて居ることを蟻で名づけてしまふからいけない。蟻の何處を何うみて居るか分らない。物によつて觀察の要目を定められるのは危険。

堀 蟻と話してゐる時があるからね。

倉橋 熟練家は何處を見て居るか見當がつくだらう

ね。

堀 その子供は此處に、あの子供は其處にと分るだらうと思ふね。觀察の型、個性が、おぼろげにも、永の間には見抜く必要がある。

倉橋 同時に、普通一般として、何ういふ風の興味を持つか、東京と田舎とでは、或は海岸では變つて來るか。平均標準が出てくれば、ビク／＼しなくてよい。

堀 その場合に口出ししなくても先生も觀察すればよい。何うせ違つた觀方をして居る。先生の方に引つ張られる。

村上 先生の方だけに興味がある場合に、子供をその中に引き入れてもよろしいのでせうか。

堀 子供に興味のない材料だつたら引き入れようとしても入らない。

倉橋 だが、大體、自然に、先生の持つて居る方にさうなつて行く。

堀 村上君が僕を見習つて龜やみみずに興味を持つて来ると同じさ。及川さんなどはみみずがきらひだからだめだがね、僕も相手をみて教育的にやつて居る。(一同笑)

倉橋 註釋する、みみずを捕つて来る堀先生は、觀察材料になさるんだが、これがなつかしき夫らば、及川さんだつてね。

堀 始めは逃げたが………

教材の蛇なんかはさう。見ないからますます迷信的になる。蛇だつて可愛いがる人があるんだもの、世話すると可愛くなる。

倉橋 觀察材料は、不斷に子供に交渉あるものが多い。種々な物に交渉出来るように、飼つたり育てたりがよろしいでせう。飼育、栽培を理科の方では、方法上からやつて居るが、幼稚園の方ではもつと外にある。生活の中にある。それから觀察の場合を三様あげた機會捕捉、表現の中

に行ふ、設定觀察の外に考へられる事がある。

(この中に含まると見てもよいが)子供は始終觀察して居るが、先生がいつも立會へないことが多い。幼児が、自宅から幼稚園に通ふ途中を研究しとかなくちやいけない。太郎はサクラ草の野原を通つて来るとすれば「もう近くのサクラ草は咲きまして」と尋ねてやることは注意を引く大きなもの。何をみつゝ、聞きつゝ、幼稚園に来るかは十分用意しなければいけない。觀察用個別地圖といふものをこさへる。

堀 それを下手すると、それだけやつて、観せない觀察になる。

倉橋 ひしろ幼稚園としては見てゐる方からやる。

徳久 設定觀察は、どれ位の回数でせうか。

倉橋 年少組と年長組とではちがふ。便宜上回数をきめてみたら、

堀 便宜上だね。時間もちがふ。

倉橋 一週一度は多いかね。

堀 アメリカのネーチュアアーティストは毎日五分くらゐ。

倉橋 短いからね。根本はきめとく、きめとかんと先生がズル／＼、遊戯許りやる先生が出来るから。

堀 一週に二三度。

倉橋 小だしにだらしなくするより、何うです。一週に一度やつてみたら何うです。

堀 材料がなくなる。

倉橋 月に一度ときめちやすくないね。

堀 この土曜日に僕が、やらう。

倉橋 やつてもらつて模範を將來に立てるさ。

菊池 ぢや早速明後日も願ひします。

倉橋 主事さんだつて理科の知識を教へるようのとがあつたら、抗議を申込まなくちやいけないよ。(笑)

堀 さあ、この邊で切り上げよう。どうもありがとう。

兒童の教養

富士川游博士著 堀 七 藏

兒童をば善く且つ強く、又我々國民の要求に副ふやうに教養せねばならぬことは誰でも痛切に感ずる所である。之が爲め第一に必要を感ずることは兒童の教養に關する現代の科學的知識の要領である。本書はこの必要に應ずるため中山兒童教養研究所に於て兒童教養に關する通俗科學展覽會に用ひた表紀圖畫寫真等の類より更に實際に緊要なりと認められるものを選ばれたものである。目次を見れば總説、遺傳、發育、乳兒、幼兒、學齡期兒童、成熟期兒童、器官、榮養、衣服、住居、睡眠、疾病、異常兒童の各項目に亘つて現代に於ける科學的知識の精華を集め簡潔に解説してある。誠に兒童の教養に關する良書。是非熟讀せねばならぬ。特に推奨するに躊躇しない。

(定價金一圓七十錢 發行所 養正書院)

歐米に於ける學校給食の現状 (承前)

榮養研究所技師 原 徹 一

六、獨逸に於ける學校給食

イ 概 説

獨逸に於ては從來貧民兒童の爲めに部落的に救濟を續けて來たが、大戰後歐洲に於ける食糧管理者たるフーヴァー氏より貧民兒童救濟資金を受け國家は之を主要都市に分配し多數の兒童を救濟し來つた。處が一九二五年の春に到つて此の救濟資金分配期を終了した。時恰も國會の開會中であつたので今後の問題につき論議した。或者は現在の如き國家經濟狀態では到底從來の如き學童の給食繼續は不能なりとして給食中止を唱へたが、多數議

員は給食は實際に國民の保健上必要なもので、しかも効果あるものであるから、今後も繼續すべしと主張し、討議の結果一九二五—一九二六の補助費用として五〇〇萬マルクの支出を決した。翌年の同期に到り同じく五〇〇萬マルク支出を決議した。然るに既に當時給食事業を指導せる榮養及農務省 (Ministerium für Ernährung und Landwirtschaft) の小兒給食委員は之に満足せず、更に多額を要求したが通過を見なかつた。

一九二六年度に全獨逸に於ける給食狀態を數字的に見ると

被給食者 六五〇、〇〇〇

内 譯

小 學 兒 童	五五〇、〇〇〇
---------	---------

小 兒	七〇、〇〇〇
-----	--------

貧 民 母 親	一九、〇〇〇
---------	--------

青 年	八、〇〇〇
-----	-------

此の内小學兒童は一五〇〇團體よりなり六〇〇〇ヶ所の調理所を有す。此の外夏季に限り六〇〇團體の林間學校が設けられ、六萬の兒童が給食を受けた。

此の給食に要する費用は到底五〇〇萬マルクでは足りないのは當然である。それ故此の金は補助金として地方團體に交附する。之は榮養及農務省内小見給食中央委員の手によりて分配するのである。此の委員會は地方委員會(各洲)給食團體委員會(各町村)の申請と實地調査成績とを考慮して分配するのである。給食に要する經費の財源を百分率で示すと次の様である。

二五バセント	國 家
一五バセント	地 方
五〇バセント	團 體
一〇バセント	父 兄

各團體即ち各地方町村の負擔が一番多く總經費の半額である。此の他各地方團體に保安組合を組織するものがあつてそれ等が物資の寄與をなす事がある。處が救濟を要する兒童の數は逐年増加し、各國民の生活狀態も非常に窮乏に陥つて居るのに一方では經費の増加がないから、其の結果給食事業の榮養効果が低下する。それ故學校醫や教師は國庫補助の増額を盛に運動して居る次第である。

被給食小兒の選擇については各地方團體に於て選擇人を指名し此の選擇人の選擇に委ねる。選擇人は普通學校醫であるが學校醫の無き地方は學校長又は學校世話人を以てこれに充てる。此際はその地方に居住する醫師あれば其の共力を仰ぐが地

方に醫師の無い處もある。そんな地方に於ては遠隔の地の醫師を迎へる事もあるが大抵醫師なくして選擇人が獨斷で選定する。

給與する食物は地方によりて著しく異なる。地方には飲食に關し傳統的の因襲あり、而して人民は之を固執する。此の事は最初給食事業を開始する以前より分明して居つた事實であるから、それに對して適當の處置を採つて改革に力めたが仲々困難であつた。此の爲本事業の遂行に多大なる支障を來した。

給食と共に榮養教育を試みたが之れが甚だ困難で、地方によつては遂に不可能に終つた處さへあつた。其の一例を示すと新鮮なる牛乳を用ひぬ部落がある。牛乳の飲用を奨めても嚴として應じない。此の地方には古來よりの食養法がある。それに依らず牛乳などを飲用する事は斷じて不可で有るとて之を拒絶する。然らば其の榮養法はと問へ

ば即ちクエカー法(Quaker法)であると言ふ。そんな風であるから此の因襲を打破し、榮養向上を圖る爲に醫師を配して指導せしめたのであつた。

流石に都市並に附近にはこの古代的因襲はなく何れも文化されて居るために生乳を喜んだ。それ故ベルリンと、ハンブルグ、ミュンヘン等大都會にはパン生乳を與へ、ライン西部地方の如き工業地帯に於ては生乳の代りにミルクカカオ又はコンデンスミルクを與へたが、残りの村落地方にはミルクを好まざるが故に混食物即ち代用食品を與へた。都會より段々地方に入るに従つてミルク製品を嫌惡する傾向が濃厚で、ボンメルン(Pommern)の如き農業地帯は昔からの食養法即ち Quaker 法を固守して榮養改善に應じない程頑迷である。それ故醫師を配して指導し小學教師を教育し其の他あらゆる方法を講じて居るの實狀にある。

榮養向上の目的を達する爲には食物の質の低下

を恐れる。殊に幼児哺育に携はる人々に對しては油斷なく注意して萬全を期することに力めて居る。そして各地方に公共保安協會(Wohlfahrtsorganisation)を組織せしめ給食事業の成果を収める事に努力せしめて居る。此の協會の代表者醫師又は教師は國家補助金の分配に參與する。一九二六年には此の金の分配が遅れた爲給食が不充分であつた。それが爲に榮養の缺陷を生じ其の結果は校醫の診察表に現はれるに至り考慮すべき状態となつた。然し醫師又は指導者の報告には便宜上之れを隠匿し反對の結果を發表したのであつた。

ドイツ聯邦國內に於ける榮養不良の調査は一九二六年の夏に行はれた。其の結果によると一二〇〇萬の兒童中實に其の二五パーセントは榮養不良兒であつて食物給與を必要とする兒童である。五〇萬の兒童につき明確に調査した處によると、

一五% 羸弱者(一九二四年一八%)

一〇% 結核に侵されて居るもの(一九二四年

八%)

七% 神經衰弱(一九二四年五%)

一〇% 其の他の病兒

二一% 健康不良兒

此の状態を見れば現在の小兒給食の方法にては満足出來ない。然し經濟の許さない同國にては國家の補助を増し榮養給食をなすは不可能とする處であるから、せめて小兒に榮養に關する學校教育を盛にし兒童各自の自覺を促す事に留意する外はない。最近獨逸教員聯盟の理事は教員各自が學校給食方法並に榮養教育法に關し機關雜誌に論文を發表する事を獎勵し教員各自の覺醒を期して居る。

右はかねて筆者が獨逸聯邦榮養及農務省小兒給食主任クララー、ヘンリック(K. Henricke)女史を訪ふた時、同女史より主として聴取した處であ

る。それから筆者は同女史の案内で伯林市榮養調理所、小學校、畸形兒童療養所を參觀した。

□ 伯林市榮養調理所

歐洲大戦中に設備せしものと云ふ。失業者、貧民及其兒童を救護する目的で給與する食事を調理する處である。伯林市に五ヶ所ある。

余の訪問したる調理所はバラック式平家建てであつて毎日一萬四千人分の食事を調理する。

設備は倉庫芋洗器、人參、大根の脱皮器及び、一分時に百二十封度の薯の皮を剝く器械、キャベツ刻み、豆穀物洗滌器、煮沸釜、八十七臺の自動車などがある。一週間分の献立を製作して置いてそれによつて調理する。肉を主として用ひ魚は二週に一回位と云ふ。調理には殆ど女を使用する。

ハ 小學校の實況

前記調理所で調理した食品を朝晝二回配達を受ける。榮養不良兒に榮養食を給する目的よりも寧

ろ貧困兒救濟を目的とするものである。市役所より一校に一人宛食堂監督を派遣し、學校には食器を洗ふもの及び食事を供する者が居る。各生徒は與へられた一定の切符と引換へに食事を受ける。

伯林市に於て朝晝二回に延人數として約七萬五千人の兒童は此の食事を受ける。此の數は全兒童の約二五バセントに當る。

調理の内容は極めて貧弱なものである。質を低下して量を増さんとする目的に基いて居る。

其の献立表の一例を示す。

一九二七年五月

月曜日 肉入ソーメン

火曜日 グリンビー、大根、馬鈴薯、豚肉の

粥

水曜日 果物、肉桂、砂糖牛乳入り米粥

木曜日 馬鈴薯、キャベツ、豚肉

金曜日 菠薐草、馬鈴薯、卵

土曜日 扁豆、馬鈴薯、ペトコン

ニ 骨疾並に畸形兒童療養所

獨逸には尙僕病或は類似の疾病多きため、伯林市に於ては社會施設の一法として光線療養によつて乳兒幼兒の同病豫防並に治療をなす所がある。

又之れと同時に學齡兒童を主として收容する療養所もある。前者は乳兒の光線療養を主とするものであるから茲には略す。後者は榮養療法を主として學校教育をも併せ行ふものである。療養所は一九二一年の創立に係る。役人は醫師一名看護婦五名教師四名調理婦二名、其外掃除婦小使等。兒童は午後八時に出頭朝食及晝食を攝り學課と體操授業を受ける。

食事は主として牛乳とパン、バターを與へ副食物として馬鈴薯豆キャベツを與ふるを常とする。牛乳は飲み得る丈け與へるが兒童は好まない傾向がある。降雨雪なき限りは食事も授業も屋外とする。

設備としては食堂、教室、治療室、浴場、炊事場、室外横臥用板床がある。教育上の參考として兎、鳩、魚等の動物を養ひ植物の栽培もやつて居る。

本治療所にて治療したるものには退所を命じ、通常學校に通學させる。治療に二年の日數を要するもの尠しとせざるよし。キツシ教授指導の下に行ひ、兒童の衣服は酷暑時と雖も極めて薄い海水着様のもの一枚を着用せしめるのみである。スエーデンあたりの同種の學校又は療養所と全く反對のやり方である。

× × × ×

× × × ×

幼稚園に關する夏期講習 會の所感

氏 原 鏡

本年幼稚園に關する夏期講習會は、文部省、幼稚園協會、佛教保育協會、昭和保姆養成所の四つが開催せられ、炎暑の折柄にも、各講習會は、講師の懇切なる講演に、講習會員の熱心なる研究心と相待つて盛會なりし。此開催により多大の利益を與へられしを感謝す。

文部省講習は七月二十二日より同二十七日迄六日間、東京女高師講堂に、幼稚園協會のは七月二十三日より同二十五日迄三日間、東京女高師講堂

に、佛教保育協會のは七月二十七日より同三十一日迄五日間、東京市大塚市民館内に、昭和保姆養成所のは八月一日より同四日迄四日間、東京市一つ橋通り帝國教育會内に於て開催せられ、各講習場は溢るる計りの出席者にして、其會員は全國にわたり、遠くは朝鮮臺灣北海道より上京せられ、此會員中には、文講、幼稚園協會、佛教、昭和の四講習を通じて、聽講せられし五六の會員を見受けたり、之れ文講の初講七月二十二日より、昭和の終講八月四日迄の十四日間を受講せられたる、其熱誠を感歎して措く能はざる次第なり。

講習會員の年々若き方の多く成り行きて、年輩者の小數の傾向を見る、中には女學校卒業直後の方と思はるるあり、斯る子供らしき人の保育者な

るを思ひて何となく物足らぬ感なきにしも非ず、併し之れは自分の如き舊思想よりの杞憂なるもので、現代の若者は昔時の者に比して、時代思潮の進化により其心理状態は發達し、其高女教育を了へて幼児教育の道を修むるに、其學識により理解力に富みたり、昔時何事も老輩を尊びて若輩を次にせし時代は漸く去らんとす。殊に活力旺盛なる幼児に接する者の動作の敏捷にして輕快なる要は、若者に於てなさるるもの、兎ても年長者の及ぶ能はざる處にして、此點若者に一步を譲らざるを得ず、殊に保育上必須なる、唱歌及び遊戲の講習を觀て、其音調の流暢、其動作の輕快圓滑なる兎ても長者の表現爲し得られざる處あり、又手技の講習を觀ても、其指端の鈍り勝ちにして、敏捷に手際よき成績は得られざるものを感じず。

併し若者の保育の眞髓に達せんには幾多の經驗と研鑽を要す。宜しく此心を以て先輩に就きて學

ぶ様ありたし。又年長者は其首脳部にありて能く若者を指導して益々其能力を發揮せしめられたし。

以上本年夏期講習會の四ヶ所の席末に列するを得て所感を述ぶ。終に臨みて年長保育者年少保育者の能力の相待つて、保育上に當られん事を希望す。

文部省講習會員として、學習院教授宇佐美氏の受講せられし事は感激に堪えざる次第なり。

又氏の幼稚園協會、昭和の講習會の兩所に於て、歐米保育の實際に付ての御講話は、聽者一同の參考となり刺戟となりて感動を與へられたる事を感謝す。

倉橋先生の本誌五月號に

於て保姆諸氏と園藝趣味

の記事を拜讀して

在鎌倉 膳 眞 規 子

回顧すれば、今より二十年前の初夏の頃、京阪神三市聯合保育會（現今の關西保育大會の前身）が神戸市に開催された時、倉橋先生の御講演がありました。之れ先生が關西に於ける最初のものでありました。

關西保育者は豫て先生の、幼兒教育の權威者なるを御慕ひ申上、其御高説を新聞に雜誌に拜見して居りましたが、未だ親しく其御講演を拜聽するの機會を得ざりしが、此三市聯合保育會に於て、關西保育者一同が幼兒教育上、最も有益なる御講演に接するを得て、大に覺醒を興へられ、満場の

會員は感喜に満ちたり。

此時の演題は、幼兒神經系統の擁護に付てと言ひ、之れを先生は最も御熱心に御指導下され、其主要なる意味は、自ら發達する自然を其自然の理に從つて育てて行くと言ふ、幼兒教育の一大原理を、先生は斯く二十年前より、我々に教へられて居ります。爾來此主義により、設備不完全なる在職に在りて、自然的接觸の考案をめぐらし、種々工夫をなし、明き箱又は陶器の役に立たぬ物を以て種を蒔きて、窓園藝を試みたる處其成績よく、發芽發育順調に終に、美しき花開き、幼兒は此の發育の經路を興味深く、漸く自然物に興味を有し日曜日などの散策には、自然物を採集して、幼稚園に持參する様になり、又家庭よりも心がけて、父兄等の、自然物を持ち來り材料は豊富となり、斯の如きは、職員努力一致の結果にして、長き在職の年月も、幼兒と共に楽しく此生活を續けたる

事は、全く倉橋先生の御指導による賜物なり、今本誌五月號先生の、保姆と園藝趣味なる記事を拜讀して今昔の感を深くす。此在職中の園藝趣味は今尙忘るる事出來ず、引退後は、京都市外嵯峨に茅屋をしつらへ、草花の培養を唯一の樂みとし、其發育もよく、切り花などは、知人に贈りて喜ばれ、此嵯峨の地は冬期寒氣強く病體に適せず、園藝も閑なる時となりて、舊冬上京、本年一月鎌倉なる親戚の廣き邸宅に移る手傳ひを兼ね此暖地に静養かたがた計らずも今日に至る。此鎌倉の地は冬も暖かく、天氣のよき日は、海濱にて幼児の砂遊びを爲し又貝類を拾ひて遊べる様は、他の地方に於ては見られざるものなり。春陽の季節を迎へては、徒らに過す事出來ず、其新邸に新らしき花壇を造り、其砂地に適するいろ／＼の種子を蒔き或は苗を植ゑ球根などを培養するに、其發育よく、美事に開花して、庭の面は實に美しくなりし

かば、之れが趣味をもたざりし主人初め子供等の漸く、園藝趣味を起こし、當今では家族之れに没頭するに至り、新設の花壇とは見えざる程の美觀を呈せり、又盆栽物も數鉢も成育よく、之れと切り花とは常に食卓に裝飾せられて、一同は食事しつつ、園藝上の話をなし、此自然美より互に心情を融和し一家團樂の樂を爲す事となり、實に此自然より受くる偉大なる作用は、幼兒の上のみならずして、大人間にも効果ある事を感じ、終に臨みて末筆夫禮ながら、本誌每號に、大岩金先生の園藝に付ての培養上培富なる學理と、其御懇切なる御指導的説明の大に私共の園藝に利益をお與へ下さる處多く謹んで御禮申上感謝の意を表す。

葡萄

新庄よしこ

今朝幼稚園へ來てから保育實習生の一人と幼兒

三人とて葡萄を買つて来てお盆にのせて机の眞中に置く。

グループの一

遊戯室から歸つて來た幼児室に入り、このお盆を見つめながら腰かける。このグループ口數少ない子ばかり集つてゐる。誰か一人でも何か云ひ出すかと思ふに、いかにも不思議そうで、——家では見なれてゐる葡萄でも——お辨當のほかに食べるものが机の上に置いてあるいかにも變だといふ表情皆の顔にありありと見る。何も云はない。しかたがないから

「これなあに」

「ぶだう」

「ぶだう」四五人つゞいていふ。中にはそんなものづくに知つて居ると顔の子あり。

「なつてゐるの見たことあつて？」

「ない」

「ない」

「ある」よくきいて見ると店にあるのを見たといふ話、

「私、繪で見たことあるわ」

そこで室の窓から見える藤棚を一緒に見ながらぶだうの房をぶらさげて見せる。幼稚園にもぶだう棚があつたらいいなと思ひながら。

「すぎ？」遠慮しがちにうなづく。すぎ？　ときいた以上食べさせなければと思つて、食べませうねと云ふと、嬉しそうな顔する子あり、中には、家では食べるけれどこゝでは厭だといふ。

洗つてあつたので六つ位づゝわける。

「皮と種は出すんですよ」三人はペロリとたべてしまつた。二人はたべかけてなか／＼食べてしまはない。殊に一人は一つのたまを舌の先でころろさせて樂しむいとほしみつゝニコ／＼してゐる。あとの二人は食べなかつた。ついつつかりし

てどんな味だつたかきくのを忘れてしまつた。

グループの二 六人

良「やあ、ぶだうがある」

謹「是、何し(す)るの」

保「謹一郎さん、これすぎ？」

良「謹一郎さん考へてるね、僕ね、毎日バンの前

にきつとぶだう食べてるの」

保「正雄さんは」

正「僕、食べちやいけないの、だから知らない」

良「僕の家になつてんの、青ぶだうが」

正「僕も見たことはある」

保「どこぞ」

正「富浦で」

良「ぶら下つてゐるよ、竿でつつかへぼうしてあ

るよ」

この間良一さんは時々首をちぢめて顔中笑にし

て話をしてゐる。

涉「僕食べないの、僕もらつて行かうかな」

○「バスケットがないから持つて行かれないぢや

ないの」

正「お辨當はあさつてからだから腐つちやふね」

良「そしたら又いゝのを持つてくりやいゝ」

皆に少しづゝ分ける。良一さんと信夫さん隣り

合つて腰かけてゐてつい二人ともとなりのを食べ

てしまふ。

良「よせやい、まちがへた、アハ……」

涉「僕、もらつて行かうかな」又、涉さんがいふ。

「どう、おいしいの」皆うんといふ、それぢや

味がわからない、あまいのすつばいのとささく。

「あまゝ」

「すつばい」

「信夫さんそんなに笑つてばかりゐないで、ど

つち、あまいの、すつばいの？」

信「ウン……、甘い、すつばいウン……」

良「一等おしまひが一等おいしいかつた。是ね、上からチョコキツと切つてざるにいれるのね」

この中二人はたべなかつた。

グループの三 六人

お盆を見てうれしそうにはいつて来て章江さん

章「これね、皆たべないでも汁ばかりたべるの

よ」

房「私、なつてゐるの見たような気がするけど忘

れちやつた」

章「小父ちゃんがつても澤山たべてお腹こはし

ちやつたの、私ね、これ魚やさんで見たの」

保「魚やさん？」

章「え、魚やさんのお屋根になつてゐたから母

ちやんが教へてくれたの、お店のお屋根よ」

八百屋さんと間違へたんぢやないのと聞かない

でよかつた。

「さあ上げませう」

「僕、林檎と梨しか食べないの」

○「あまいね」

○「あまいね」

房「甘いと酸っぱいとまざつてる」

グループの四 六人

不「昨日お家の兄様學校で葡萄の種類しらべてい

らつしやつた」

「そう、あなたはなつてゐる所見たことあつ

て？」

不「え、たゞね、ぶらさがつてゐたの」

「どこで」

「三崎に行く途中で」皆に食べさせる。

○「たう／＼、食べちやつた」

俊「僕、食べないの」

「どう、食べてごらんさないな、どう、おいしい

よ？」

「うん」

貞「これほうづきのかはりになるの」

俊「始め甘いけど少したつとすつばいね」

○「すつばいね」

儀「おいしい、兩方だ、甘いのと酸つばいのと」

——右保育日誌の一節。六歳兒——

かう書いて見ますと、「だからかうだ」といふ何物もなくわれながらまことにたわいの無いやうな氣がしますが、もの或はこゝに對して幼兒がどう動いてくれるかといふことをみるにはようございしました。

猶葡萄そのものに就いての委しいことは繪でも描かせる時に、葉やつるを添へての折にゆづることになりました。

臨海保育の所感

岸和田市幼稚園

伸びて行かう、手も足も出來得る限り伸ばさう

として止まぬ子供達を、ほんとうに心ゆくばかりのんびりと自由に何の拘束もない環境に於て遊ばせてやりたいとは、常々考へてゐる所でありました。が、愈々今年の炎熱が私共の臨海保育の動機を興へさせました。こゝに於て保育時間短縮と同時に、園から約四町程隔てた海濱に不完全ながらも四十坪ばかりの（幼兒百六十人）バラックを建て東方を葦簾にてかこひ内部の二方に帽子・鞆掛け・腰掛等据ゑつけ、ござ及日々の必需品は一定の場所にしまつて置きけす。其他の臨時必需品は、小車で運ぶことゝしてゐます。

毎朝八時出席調べをして出かけます。風の風いだ静かな茅葺の浦ルリ色に碧空、さながら鏡と鏡、かすかに浮ぶは淡路島波間近くたはむれる小鳥も見えます。幼兒達は「先生あれ何といふ鳥？ お空がきれいやな」うちすきやで」など話し合ふ折から、白き小蒸氣ポツポツといせいよく通り過ぎ

て行く。あれ／＼蒸氣や／＼と、手をたゝいて喜んで居ります。又或日は風強くて、打ち寄せる大波はものすごきまでに音をたて、すさまじうくだけ散つては又寄せてゐる。子供達はこの大波を相手に、ここまであいで／＼とかけくらしをします。かと思へば岡に引き上げた舟のつては、恰も大海に乗り出したやうな氣取りに得意がつて居るのもあります。或時は極めて自由に畫を描く、お話をさく、お遊嬉をする、蓄音機をさく、たたみ紙などして喜んで居ます。時には地網引の光景を觀ました。婦女子を交へた數人の手で網引歌につれ、ロクロは廻される、傍で網は引かれる、見てゐる子供達は、もはやぢつとしては居られません。思はず、われも／＼と馳け寄り、頬を眞赤にエンヤ／＼とばかり引く。網は次第に引き上げられ、引く人、見る人、眼は一齊に網の中、幼兒はピチ／＼はね廻る小魚を捉えやうと夢中に走りよ

る。「ぢいちゃん一匹頂戴」とめい／＼一二匹づゝ手にしたうれしさは想像するに餘ありません。歡喜にあふれた可愛い顔が、つぶての様に走るよと見れば、砂を掘るもの、海水の通路を作るもの、忽ち生洲が出来ました。さながら水族館のやう。それは魚を活かす事より他に何物もありません。この幼兒達創造の世界が自然の恩恵に浴することの深いことを感謝せずには居られません。實にこの廣い自由な天地で、活々とした自然物による幼兒天眞の發露こそは、彼等に與へられたる特權でありませう。

かかる活動の後、涼しいバラツクの中で靜かに頂くコーヒー、或は葛湯によつてどんなに幼兒等を喜ばし疲勞を慰する事が出来たでせう。

一ヶ月に近い、かうした生活を續けて居る幼兒達は日に日に皮膚の色こげ、筋肉も何となく引き緊つたやうに見えかつて因循なりし子供達も次第

に子供らしさを増し、如何にも潑刺として來たやうに見られます。今月末の調査には、體重もたしかに増して居る事と想像されます。更に來年は、一層設備の點を考へて、身體の虚弱な子供や、個性に注意を要する子達と寢食も共にして、より以上の効果を擧げたいと存じて居ります。

園外保育

山崎 ひさ

蟹 狩り 七月一日午前九時半發

昨日の約束により、藥用靴を用意して、三の丸、廣小路を通り、島崎海岸へ引率した。どんよりと曇つた空には、氣もとどめず、行進の意氣につれ、歌ふ牛若丸の元氣よさは、町の人々を、驚歎させた程であつた。彼等はいつか、撫子組と、菊組が外遊の際、持つて歸つた蟹が、美やましかつたの

で、今日は蟹狩りの氣分であつた。

魚屋の露店、兩側に並んで賑はしい中を通り、新橋を渡り、やがて稻荷神社についた。一同參拜を終つて海邊近く引率した。

一同瞭然と、舞鶴灣は、靜な海上に、二三の發動船を玩具のやうに、浮かべ、丹後富士の雄姿は其の美しい影を四方の連山と手をとつて、水に寫してゐた。子等は思ひ／＼に語りだした。その鋭敏な觀察は驚異の眼をはり全身全靈の緊張を示し、得も云へぬ尊さであつた。

海に這入りたいな、との聲を耳にして、

海をごらん、今日は、あの様に、波はなく靜でせう。ところが、風が吹き、大波がきたら、どうでせうか。今あなたらの頭の上迄も、來るのですよ。この高い蘆の上には、泥が付いて居ます。それから、此の柔い路を、考へてごらん。小さな穴が、いくつも／＼も、あつて、何かで突いたら、直ぐ

水が出るでせう。穴の奥には、蟹さんのお家があるでせうね。

あの高いお山はと、聞けば、富士山、砲臺山と口口に活潑な答。時に、ピチ／＼、みなの顔は一齊に、お空に輝いた。くる／＼と舞ふて、囀る、三四羽の雲雀。何と云ふ美しい聲、美しい姿であつただらう。あの沈黙の歡喜は何と記する言葉も無い。無限の感謝であつた。

海へは入らぬ様約束をして、自由遊びを命じた。子等は今こそ大樂園、身も心も軽々と、野に囀る雲雀のごと、海にとぶかもめの様、山に野に海に、思ひを高く廣くして、大自然の母に抱かれつゝ嬉々として私を去つた。

やがて、龜井正美さん、見事蟹を征服して來りニコ／＼顔、さあ／＼つて、數名の男女兒によつて縛り、蟹獨特の歩行を、興味深く觀察した。

岩室も、森谷も、子蟹を捕へて紐に縛るのは、

容易ではなかつた。ふと彼方に、洋服の裾をからげ、海水に浸りゐる男女兒ありて、かけつけたるに、先生、貝が、魚が、目高が、ゑびが、あれはなに、これは何と、とてもつきぬ喜びであつたが危険を怖れて、集合し、歸途につかした。原田敏夫さんの手には、大きな筐があつた。林田さんのハンカチには、やどかりが、包まれてあつた。其他ポケットには、それ／＼の大切な獲物があつた。

新橋にさしかゝつたら、ポツ／＼雨が落ちた。けれ共、彼等は島崎海岸の夢を見てゐるのか、平然と樂げであつた。

道行く人々は、幼兒の手にさがつた子蟹を見かへりつゝ、ほ／＼笑みてなにをか懐しげであつた。十二時無事歸國して楽しいお辨當にも箸をとりつゝ、話は盡さなかつた。

海邊より 持ち歸りたる 蟹の子に

お辨當分つ 可愛し 森谷

平素純眞な幼兒をより純眞に導きたいと、念じて、出來得る限り大自然に接せしめて、保育の純化を計つてゐます。園外保育の効果は、今更述べるまでもない事でございますが、之を簡単な記録となして、時折にふれ談話の題材とし、或は、追懷談とし、或は日記から、談話の實生活を、味はくせることも、幼兒にとつて大きな愉悅であり、又保育のよき研究となるものであります。私が、多忙の旁記録した中の、この一例を、幼兒の疲れた時に讀んでさへ、彼等は、もつとく々と要求致します。

巴里便り

小林宗作氏より

左記は小林宗作氏からいたゞいたお便りの一節

四八

です。氏は日本リトミック協會組織のため、今春再び渡歐されました。(神原)

(前略) 日本リトミック協會組織の件も無事本部の承認を時ましてダルクローズ先生直屬の堅實なものとなりましたから之又御休心下さいませ。又私の研究の方もいろく面白いものを見出しましてだんく展開されて参ります。リトミックもダルクローズ先生のリトミックが主として音樂的、時間のリズム研究に對しデュデインといふ人が空閒リズムの研究から幾何學的リトミックといふのを創案されました。之は數學的であると同時に意匠、圖案、體育、舞踊、バレエ、劇等の基礎教育としても非常に面白いものであります。私はダルクローズのリトミックと、此の幾何學的リトミックとを結合させると一増面白い綜合的な、藝術的教育が行はれる事と思ひまして今此の方を専心研究してゐます。音樂教育にもいろく新しい改造

運動が起てゐます、主なるものには、フランスのジエダルデユ式、セルバ式(ピアノ教育)イタリイにバツカネルラ式、アメリカにケーデー式等であります。幼稚園の音楽教育の基礎としての體育を作らうと思つて之等の新しい方法は皆委しく調査してゐます、ジエダルデユは方法に於て、ケーデー式は心理學的基礎に於て甚だ面白い組織です、此の二つを組み合せる事によつて理想的な幼兒の音楽教育の體系で整ふ事と信じまして目下非常な興味と期待を以つて此等を研究してゐます、何れ歸朝の上は皆様の御批評を仰ぎ度いと思つて居りません。

パリの女子高等師範學校の附屬では、此等の中で幾何學的トミックとデエダルデユ式音楽教育とを採用してゐます。又附屬の保姆養成所でも幾何學的リトミックを課して居ります、女高師では非常に優遇して下さいまして、リトミックの卒業

試験まで參觀させて下さいました。(保姆の力の標準を知り度いと思ひ特に願ひました)

フランスの教育に就ては、從來日本の教育家達は全く興味を以つて居ない様ですが、私はフランスの數學教育には或る勝れた特長があるだらうと思つてゐます、フランスの教育の根本方針は數學と文學にあつて、デカルトとユイゴの感化によるものと稱してゐます、フランス人はたしかに聰明な頭を持つと思つて(證明の材料はたくさんあります)ゐます、そして其原因に就ては一口に云へぬ事は勿論であるが、百年來の不變の教育方針にも依ると思ふので特に數學教育に就て興味を以つて調べて見ました。此處に或るシステムに依つて幼兒の爲の數學的基礎教育の面白い方法が出来るといふ事を發見しました。此方は私の専門でありませんが深くは出来ませんが幼兒、及小學低學年位の方法までは調査が出来ました。此れ

幼稚園唱歌編纂

委員會について

私共幼稚園教育の實際に携はつてゐる者の、帝に困つて居りました幼稚園の唱歌について、一つの光明を見出しました。それは東京音楽學校の諸教授と、幼稚園の實際家とが屢々集合して、幼稚園の唱歌について協議をいたして居ります。そして只今のところ、幼稚園として欲しい唱歌の題目を出来るだけ澤山持寄り、それを一回で協議して大體の題目を三四十選び、それ等の歌詞を廣く小學校教員及び幼稚園保母から募集して當選歌詞を決め、それを作曲の大家に依頼して曲を附す、と云ふことにまで話しが進んで居ります。幼稚園唱歌の歌詞は、子供の心持そのまゝを現はし度いと云ふ趣意から、それには何と云つても子供と日々接觸して居る先生、保母の應募に持つのが最ま適當だと云ふ考からでございます、何れその中、東京音楽學校内教育音楽協會の名で、皆様の幼稚園までその募集規定その他の委細が配達されることと思ひますから、幼稚園唱歌のために奮つて應募せられんことを切望して止みません。

も何れ御批正を仰ぎ度いと思ひます。此他豐啞の談話にアクセントとリズムを導く方法や、舞踊譜の發見等、中々愉快な旅行になりました。之等の研究は、十月下旬頃までに整理を終へて十月下旬にジュネーヴのルツソー研究所の附屬幼稚園に参りましてその組織に就いて委しく調査し度いと思つてゐます。此の研究所には、これで三度行きますから今度はしつかり出来るだらうと思つてゐます。(デクロロリーとモンテツソリーに就ては大體調査が出来ました)それからミラノに参りましてバツカネルラ式音楽教育を観望してドイツに入りスツツカルトで色彩リズムの研究を観てベルリンに行きボーデーのリズム體操を實習し、十二月か一月頃歸朝の途に就く事に豫定してゐます。

歸朝の上は又いろ／＼と御力添を仰ぎ度いと思ひます。どうぞ皆様にもよろしくお傳へ下さいませ。(後略)

十月の手技指針

目白幼稚園 和田 實

十月とは云ふものゝ、此冊子を會員諸君の御覽になるのは多分月の半ば頃だらうと思ひますので、茲には十月中旬から十一月中旬頃の分を考へることにませう。尤も、所に因つて、多少早い晚いがありませうが、重に、東京附近を主として書きます。他は然る可く御類推を願ふことにしませう。

(一) 幼兒の生活上、此月の初め頃には衣變(更衣)と云ふ、著るしい事項があつて、子供には人々の衣服、服装と云ふことに多分の注意を拂つたことゝ、思ひますから、當分は人形の更衣、紙細工の着せ變へ人形など手技と遊びとの混合した、

あばさん遊び、飯事遊び(まじ)、ピクニックごつこ等が尤も相應はしい仕事でせう。飯事の材料として自然物は豊富にあり、着物の材料としては、色紙が種々澤山にありませう。

(二) 街上の變化としては冬物の賣出しが始まることです。賣り出しの宣傳やら、廣告やら、一としきり賑やかなこととせう。チンドンやの眞似、樂隊の眞似はよい音樂の練習とせう。手技としては木の葉を材料とした笛の製作、すゝきの穂や、もみぢした木の葉での裝飾夫れ等を材料としての樂隊遊びは男兒の面白い遊びとせう。勿論、是には九月の中旬から十月の中旬に掛けての鎮守のあ

祭りの影響も大きいこととせうから、御興の眞似も交ることとせう。御興の製作もよい手技の一つであります。少し手の混んだものは先生の手傳を要しますが、共同遊びの促進のためには大きな利益とせう。危険のない位な稍太き木の棒と多少の板とを出して、他は色々の自然物を材料とするとよいと思ひます。

(三) 自然の變化。としては何としても落葉と紅葉と果實ととせう。之を材料としては貼り繪が出来る。模擬品が出来る。種々の人形も出来る。紅葉した木の葉を圖畫紙や羅沙紙の上に色々にはりつけたり、多少、缺など入れてしたりなどすると、中々面白い貼り繪になります。草や木の葉や木の實を材料とした模造品も色々と工夫が出来るとせう。此月ほど手技手工の澤山、出来る月は一才外にないのですから、幼稚園では中々忙しいとせう。大に子供を獎勵して、製作興味をそゝつて

やつて子供を大に忙しく、勤勉に働かせるのが必要です。木の葉の色別分類遊びも一つのよい遊びとせう。手技、手工ばかりでなく、木の實拾ひも是非したいものです。否、木の實拾ひばかりでなく、收穫遊びもしたいものです。草の實を集めることもよいとせう。どんぐり拾ひも必要です。都會では態々芋堀りなどの催ふしをしますが、夫れ程でなくとも色々機會と材料はあるとせう。序に一寸脱線しますが、東京附近などでよく催される學校生徒の芋堀りは幼稚園の子供にとつては餘りほめた催ふしではありません。場所が人糞を充分に撒いてある微菌だらけの畑ですから、疫痢などに罹り易い幼兒には餘り感心しない催ふしであります。兎に角、收穫に關する色々の事は觀察事項としても面白いし、其結果は手技にもなり、圖畫にもなり、玩具にもなるし、(葎類も忘れぬやう)秋は何にしても先生と子どもの忙しい時でありま

す。是に連れて

(四) 催ふし事、として遠足、の流行すること
は何よりよい保育事項であります。幼稚園とし
ては餘り感心しません。其理由は少し大きい脱線
になりますから今は止めますが、夫れよりも秋晴
れのよい一日を選んで適當の場所で、幼稚園に相
應はしい運動會を催ふことが最もよい保育事項
だと思ひます。運動會を催ふずに就いては先生以
外の補助者を豊富に頼んで先生は主として幼兒の
活動を指導する方面にのみ力を用ゐる様に組み
立てることが肝要です。此爲めの準備と其結果と
は或は手技の促進となり(旗造り、競技用品つく
り等) 圖畫技術の向上となり、保育上には幾多の
好結果を生みませう。お月見も十月の六日が十五
夜、十一月の三日が十三夜ですから是も相當に材
料となるでせう。觀察も度々繰返されるでせう。
繪も色々出来るでせう。お供したおだんごはふか

し直して「しんこ」細工となります。すゝき、は
たんぼ槍、傘など玩具が出来ます。また粘土では
等の眞似も出来ます。

(五) 菊の花。よい保育材料です。先づ充分に
觀察することです。材料は度々に出すが宜しい。
繰り返しおもちゃにして居る間に、花と葉と莖と
根とに就いて充分に觀察出来るでせう。觀察し、
おもちゃにする度に、一部分づゝ確かに智覺を進
める様に指導することが肝要です。圖畫としては
色々塗る繪が出来、寫生畫が出来るでせう。觀
察した後の材料で臺紙の上に貼り繪が色々出来
ませう。飯事の材料にもなりません。また、反對
に紙やテップや其他のもので、菊の花の模造も出
来るでせう。皇室の御紋章もはつきりわかりませ
う。貼り繪、塗り繪、充分に確實に知覺させま
せう。

(六) 十一月初めの重なる社會事項として明治

節(十一月三日)と十五日の七五三のお祝ですが、明治節の方は崇敬なる神事として取扱つて、お話と圖畫の材料を工夫するがよいでせう。此時、處々で運動會の催ふしがあるでせう、見物させることとす。七五三のお祝は子供同士のお祝氣分を出すことだけでよいと思ひます。其爲めに手工品の進物を造ることは相應はしいでせう。後の仕事として明治節と同じく自由繪や塗り繪の材料となることとせう。

(七) 霜に就いての觀察が出来ます。霜よけの作業も出来ます。霜よけは色々の方式がありますし、其形のきれいなのがありますから、圖畫寫生の材料とするに適當です。枯れ草で之を眞似造くりするのも興ある手工です。

以上で、十月半ばから十一月の初めに掛けての手技關係の事項は大要を盡くして居ると思ひます。が具體案として今少し詳細に書く積りで、編輯の

方とは御約束したのですが、丁度第二目幼稚園と保姆養成所の建築工事に掛る處なので、非常に多忙で、充分に御約束を果すことが出来ませんでした。後日に補訂をいたすことにして御許しを願ひます。

(本稿は爾後一ヶ年、毎月、御執筆いたゞける事になりました。編輯者)

家庭教育指導者

講習會と家庭教育展覽會

右何れも文部省主催。

講習會のうち、大阪に於ける分は既に九月三十日より十月四日迄、盛會裡に修了された。

なほ來十一月五日より十一月八日まで、九州福岡市でも同様のものが開催される。展覽會は、十一月、東京、大阪兩市に開催、



おはなし

不思議な栗

小野直

「僕ついでに行けないんだよ。次郎さん待つてね、次郎さん。」

次郎さんは面白がつて、太郎さんと一しよに、走つて行きました。

「太郎さん、次郎さん」と、あとからのぼつてゆきました。

小さいお山の上まで来た時には、太郎さんと次郎さんとは、すっかりいぢわるな子供になつてしまひました。

「三郎さんを、おひてきぼりにしやう」

「二人でかくれやうよ」

太郎さんと、次郎さんと、三郎さんと、三人でお山にあそびに行きました。三郎さんは小さいので、太郎さんや、次郎さんが、ずん／＼登りますと、一しよに行けずにおくれてしまひました。

「待つて、待つて、太郎さん」

と、いひますと、太郎さんは前よりもつと早くいそいでお山をのぼります。

それから、太郎さんと次郎さんが山の向に走つて行くと、三郎さんも一生懸命に走つて、ついて行きました。それで歩いてきぼりにする事が出来ませんでした。

太郎さんと次郎さんが、木のかげにかくれると、三郎さんはすぐさがしだしました。

それで、迷子にすることも出来ませんでした。太郎さんが、きれいな花を摘むと、次郎さんもきれいな花を摘みました。三郎さんもきれいな花をつみました。

太郎さんがお山の上を走りますと、次郎さんも走りました。三郎さんも走りました。

太郎さんも、次郎さんもうけない子ですから、三郎さんを何とかして泣かせやうとしました。

◇……

太郎さんは、お山にひびき渡るやうな大きい聲で、「つまらないなア」といひました。それが谷に

ア……とひびきますと、次郎さんが、すぐ眞似をして、負けぬ氣で「つまらないなア」と、聲限りいひました。すると向から「つまらない……？」と響て來ました。太郎さんと次郎さんは一しよになつて「つまらないなアあ」といひますと、「つまらないかい」と響いて來ます。

大きい聲を出せば、ほど、向からはつきり綺麗な聲がして來ます。たうとう、太郎さんと、次郎さんと、三郎さんは、一しよになつて、聲のする方に話かけました。

三人「あーい。誰だあーい」

「あーい。誰だあーい」

三人は顔を見合せて、驚きもし、面白いとも思ひました。

太「誰だらう。男だね」

次「男だね。どこかのおぢさんだね」

太「さうだ。何してゐるんだらう」

次「何してゐるんだらうね」

三人「あーい。何か……頂戴」

「あーい。あーい。何でもさうから」

三郎「太郎さん。あれは、どこかのあぢいさんの聲

だよ」

三人「あーい。何か頂戴」

「あーい」

見る間に、あぢいさんが一人、草を分けて道もない坂を昇つて來ました。白い髪の毛をたあぢいさんでした。

「お前たちか、何かほしいといったのは。私にいつて來なさい」

太郎さんと、次郎さんと、三郎さんとは、あぢいさんのあとをずん／＼ついて行きますと、いつの間にか、立派なお家に着きました。その家のうちの庫に入りますと、その庫には、美事な栗が、山のやうに積でりました。

太「あぢいさん、澤山頂戴ね」

次「僕にも、澤山ね」

三郎さんは、あぢいさんの呉れるのを待つてゐました。

あぢいさんは、三人に三つづつ、大きい栗を渡しました。

「さあ、この栗を大事に待つてお歸んなさい。皆、おなじ大きさで、皆、おなじほどふしぎな栗なんだよ。それで、あぢいさんがあげた栗だけを大切に持つておかへんなさい。外の栗をまぜてはいけないよ。道に落ちてゐる栗をひろつてはいけません。私のあげた栗だけだよ」

と、いひきかせました。

太郎さんは、「さう、大丈夫だ」と、お禮もいはずに、そのまゝ馳け出しました。次郎さんも、僕だつて分つてる。太郎さん、待つて」といひながら、走り出しました。

三郎さんは、「おぢいさん、ありがとう」

とお禮をいひました。おぢいさんは、はじめてに
つこり笑ひました。

「さようなら。ほしくなつたら、またおいでな
さ」

三郎さんは、一人あとに残されたので、大聲で
「太郎さん」「次郎さん」と、今にも泣出しさうな
聲で呼び乍ら山をかけて下りました。

太郎さんと、次郎さんは、途中で栗の木の下を
とほる時、おぢいさんとの約束は思ひ出しはしま
したが、「誰も見てゐないから、拾つても大丈夫だ
僕、たつた三つ位ぢやたりやしない。おぢいさん
はけちんぼうだな。あんなに澤山あるのにたつた
三つくれた」といひながら、そこらの栗をポケッ
ト一杯ひろました。次郎さんも、太郎さんの眞似
をしてひろつてゐるうち、おぢいさんとしたお約
束をすつかり忘れてしまひました。それで拾つた

栗は、ポケットとハンカチと一杯になりました。

三郎さんは、大きな栗はいくつも／＼見はしま
したが、約束を守つて、拾ふ事はやめて、太郎さ
んと、次郎さんと一しよになつて歸つて來ました。

太郎さんは、この澤山の栗を、兄さんに見せま
した。兄さんは、どれがふしぎな栗か見分がつき
ません、又どれにも／＼虫が入つてゐましたので
「なんだこんなつまらぬ栗を、だまされたんだよ」
といつて、川に捨ててしまひました。次郎さんは
お家にもつて歸るとお母さんに上りました。お母さ
んは一つ一つ氣をつけて見ましたが、どの栗から
も、これぞといふ不思議も出さうにありませんで
した。その上、どれも／＼一つか二つ穴があつて
虫が頭を出してゐましたので

「次郎さんのおもちゃになさい。食へるわけには
ゆきません」

と、申しましたので、次郎さんは、すつかり二階

の窓から、庭にゐるボチや、クロや、小犬にその栗を投げました。ボチと、クロと、小犬とは、一つづつ、あの不思議な栗をさがして、うまさうにいつまでもく〜ぺちや〜となめてゐました。次郎さんは、今更乍ら惜くなりましたが、ボチやクロや、小犬は持つてにげてしまつて返して呉れませんでした。

三郎さんは、あの栗を、父さんと、お母さんと三郎さんと一つづつたべました。いくらたべてもいくらたべても、おいしい栗はまたもとの大きさにになりました。

そののち何度も、栗がほしくなつて、太郎さんと次郎さんとは三郎さんは邪魔だからといつてつれずに、栗をくれたあのお山のおぢいさんを尋ねて山中をさがしました。が、あの不思議な栗は一つだつてもらへませんでした。終

— 昭和五年六月中旬 —

ボンポコ狸の

ボンポコボン

お山の奥の穴には、狸のお母さんと、狸の赤坊が住んでゐました。ここには、狸のさらひな獵師も、狸のさらひな犬も来ませんから、夜になるとお母さんと赤ちゃん、お腹をふくらますと大きな太鼓をこしらへて

「さあ、坊や、お母さんと一しよにうたうよね」

母狸「それ、ポーン〜、ボンポコボン」

小狸「ポーン〜、ボンポコボン」

母狸「ポーン、ポーン、ボンポコボン」

お月様が上からそれを見ていらつしやつて、ニコ〜と笑ひました。お母さん狸と、赤ちゃん狸は、お辭儀をビヨコンとして二ひき一しよに、前より元氣よく

村のちぢさんたちも、「ボンボコ踊のボンボコナ
ボンボコ踊のボンボコナ」とボンボコ踊をはじめ
めました。

ポチも白も「ボンボコ踊のボンボコナ」

お馬も牛も「ボンボコ踊のボンボコナ」

猫も兎も「ボンボコ踊のボンボコナ」

鶏もヒヨコも「ボンボコ踊のボンボコナ」

それはく面白いちどりなので、いつもだまつ
てゐるお月様が、又「あつは、あつは」と笑ふ程
でした。踊りが面白いので村のおぢさん達もポチ
も、白も、お馬も牛も、猫も兎も、鶏もヒヨコも
とう／＼「ボンボコ、ドッコイ、ボンボコナ／＼」
とび乍ら、一列にならんでお山にのぼつてまゐり
ました。

そして、お母さん狸と赤ちやん狸をとりまいて
ボンボコ踊をはじめました。

「ボンボコ、やれこれ、ボンボコナ」

「ボンボコ、どつこい、ボンボコナ」

狸のお母さんも、狸の赤ちやんも面白がつて、
ボンボコボンボコボン と太鼓を叩いてよろ
こびました。

折角こんな面白くあそんでゐるのに、ポチと
白とは

「あの狸を捕てやらうよ」といひ出しました。

「あの小さい狸をつかまへてやらうよ」そしてそ
れからむにや／＼むにや」と何か相談をしました。
ポチと白は、踊りながら赤ちやん狸の方によつて
來ました。「ボンボコ狸のボンボコを」皆でいつし
よに捕へろ」「ボンボコ狸を一二の三」

すると、お月様はさつきから見えてゐて「わるい
ポチと白だ」と思ひました。そして「ボンボコ狸
の一二の三」で雲にかくれてまつくらになつてし
まひました。そして、何にも見えなくなつてしま
ひました。

「オヤ、直暗だ。よく氣をつけてかへらないとおそろしいよ〜」

と、お母さん狸と赤ちやんの狸は、そのくらい間に逃げて、お山の奥にかへつてしまひました。

そして、お山の奥からボンボン、ボンボンと面白い太鼓をたゝいてゐました。ボチと白とは、おぢさんたちからひどくしかられました。

「見ろ、お前たちがいたづらをしたので、面白い踊も出来なくなつた。いやな、ボチだ。いやないだ。これから誰も、このお山にはつれて來ないから、覺えてゐろ」と、ひどく叱られました。

お月様は、まだ、空でにこ〜笑つていらつしやるのは、お母さん狸と子狸が、村のおぢさんたちの眞似をして、「ボンボコどつこい、ボンボコナ」と踊るのが面白いからでせう。

ボンボコ　ボンボコ　ボンボコナ。　おしまひ

——昭和五年七月七日——

犬と猿が仲悪くなつた話

金子彦二郎
土田和雄

毎年森の中のけものたちは、ひとりの大將をえらぶことになつておりました。そうしないとみんなが喧嘩をするからです。

去年の大將は猿でした。

猿は、高い木の枝から枝へとヒョイ〜とんでは、いたづらをするリスの頭をコツン〜とたゝいたり、また喧嘩をする兎の耳を、ひつぱつたりして、とびまはることができるので、今年もなんとかして大將になりたいと思ひ、ひなたぼっこをしてゐる兎とリスのところへやつて來ました。

「やあ、兎さんにリスさんこんにちは」

「これは、猿さんこんにちは」

「どうぞ、今年も僕を大將にしてくれるでせう

ね」

猿が云ひました。

か、ふたりはいつも猿にいぢめられてゐるので
「今年は犬さんになつてもらはうと思ふのです」
とふたりは答へました。

「なに、犬さん」

猿は眞赤になつて怒りました。

が、そこはずるい猿、早速うまいことを考へつ
きました。

こんどは、狐のところへやつて來ました。

「狐さん、こんにちは」

「やあ猿さん、こんにちは」

「狐さん、今年は是非お前に吾々の大將になつて
もらいたいと、みんなが云つてゐるぜ」

「いや、僕なんて駄目だよ、それよりも犬さんが
いゝだらう」

「犬さん、あんな馬鹿になにが大將になつてなれ
るものか、それに、犬さんはお前のことを大變惡

く云つてゐるぜ、あのお人好のリスや兎に、狐の
やうな嘘つきなどえらばないで、俺を大將にしろ
なんて」

「猿さん、それはほんととかね」

「ほんとやだとも」

「よし、犬め、敗けてたまるものか、きつと俺れ
が大將になつてみせる。猿さんよろしくたのむ」

狐は、すっかり猿の言葉を信じて、カン／＼に
怒つてしまひました。

猿は、その足で、こんどは、犬のところへやつ
て來ました。

「犬さんこんにちは」

「これは猿さんこんにちは」

「犬さん今年は是非お前に、吾々の大將になつて
もらひたいとみんなが云つてゐるぜ」

「さうかね、ありがたう、しかし、僕より狐さん
がいゝだらう」

「狐さん、あんな嘘つきに、なにが大將になんてなれるものか、ところで犬さん、狐さんはお前のことを大變悪く云つてゐるぜ、あのお人好の兎やリスをだまして、お前のことを怒るだけでなにもできない大馬鹿者だ、あんな奴をえらばないで、今年、是非俺れを大將にしろなんて」

「猿さん、いつたいそれはほんとかね」

「うそなんて云ふものか」

「よし、あの狐め、今年はどうしても僕が大將になつてみる、猿さんよろしくたのむ」

犬もすつかり猿の言葉を信じてこれもまたカン／＼に怒つてしまひました。

やがて大將をえらぶ日が來ました。犬は待つてゐましたとばかり

「みなさん、今年、是非僕を大將にして貰ひたい」

「今年、俺れにしてみらひたい」

と、こんどは狐です。

「いや、今年、僕だ、狐のやうな嘘つきは大將になんてなれるものか」

「いや犬のやうな怒りつぼくて、そのくせ何もできないやうなものは大將になんてなれるものか」

「なんだ狐め」と犬はどなりました。

「お前こそなんだ犬め」と狐もまけずにどなりました。

すると猿、時分はよしと

「みなさん、喧嘩をするやうなものを吾々は大將にすることはできない、今年も僕を大將にしてもらほう」

さう云つて猿はうま／＼と今年も大將になつてしまひました。

「なんだ、うまいことを云つてひとをだましておいて自分が大將になるなんて、馬鹿にした事だ」

犬はすつかり腹をたて

「いまに見ろ」

さう云つて、それからは、森をで、今住む里へうつつてしまひました。

かうして犬と猿は、それから、すつかり仲悪くなつたのださうです。

きれくなお知らせ

大 岩 金

一、秋蒔種子の播種

もう秋の種子蒔きはあすませになりましたでせうか、まだの方は大急ぎでなさいますやうに、その理は春蒔きと異りまして段々と寒さに向ひますこととてそれまでに充分に發根も致し發芽も致しましてその地上部が降霜の頃になりますまでには充分に是に堪へ得られる丈に發育させておかなければならないのであります。それにどうしても發芽までに要する日時も温度の下る程長くかかるのであります。

次にその播種する種類（草花）及びその方法等に就きましては既に申し上げて居りますから省略

致します。

二、秋植球根類の植込

春咲きの球根類はすべてこの際植込むのでありますからこれもなるべく早くなさいますやうに。

三、株 分

宿根性のもので春咲きのもは本月から來月にかけて株分けして置くのであります。春になつて致しましては開花までに日もなくなりますから株分けせられたために一時勢力をそがれる事になりますして開花が早く或は同じ花に致しても小さかつたり、丈が低かつたりするやうな事になりますからあまり寒くならないこの期において行ひ

年内に充分根をはらせるやうに致します。

この株分けを致します種類はデージー、アルメ
リヤ、菖蒲類、シヤスターデージー、ストケシヤ
觀賞用除蟲菊、デキタリス、シオン 有禪菊、な
ど種々あります。

四、ツルバラの挿木

赤、白とどりに垣根一杯に或は懸崖支立とし
て咲きほこる蔓性バラを見ました時には誰もがか
く咲かせて見たいなと思はれるのであります。こ
の種のバラこそは誠に育て易く又簡単に思ふまゝ
の形を造りえられるのであります。

さてこのバラの繁殖は挿木によつてどんく増
すことが出来ます。四季咲種などの上等の品種に
なりましては多くは接木法に依つて繁殖させて居
りますがまづ私共素人園藝としてはツルバラの挿木
位に止めておいても今の所よいかと思ひます。

この挿木の方法はこの十、十一月の候におさま

して徒長枝又は今春花を咲かせた枝で長くのびた
ものなどを親枝に極接近して切りその枝について
ゐる芽のよく充實したものを三、四個つけて枝を
切ります。その長さは凡そ一〇——一五糎位のも
のになります。この切つた枝は下部を芽の所から
斜めに切りはなします。かくして幾本かの挿穂が
用意出来ましたならば苗床又は適當な場所に條條
を造り是に五——一〇糎おき位に竝べます。この
深さは枝の半分位が土に埋まる程度に致します。
次に一方にかきあげてある土を覆ひ灌水してやり
ます。一般の挿木はあまり日光の直射しない場所
に致しまして水分の蒸發を防ぐのであります。がこ
の場合におさましては相當に日當りのよい場所を
選ぶことが必要のやうであります。即ち只今挿し
ますバラの枝の多くは極めて小さい芽を持つてゐ
て葉は少なく中には葉の落ちてゐるものさへもあ
ります。それ故蒸發面は比較的少ないのでありま

す。然るに時は次第に寒さに向ひますのでそのため日蔭地などに挿します場合は根の充分出ない内に寒さの爲地が凍結するやうな事になりましてかへつて切口を腐らせて活着しないやうな場合が應々あります。このやうにして日當りのよい露地に挿しましたならば後灌水の必要も除霜の設備もなくして來春までには一〇〇中九五・六パーセントまでは活着致します。そして中にはその春早くも苗床で開花するものさへもありますから來秋には是を掘り上げて鉢なり垣根なりに移しまして夫々望むままに蔓を切り或は伸ばして結びつければよいのでありまして三年四年もたちますれば立派なバラ垣根がさほど手数をかけずして出來上ります。木框又は温室のあります場合は早春二、三月の候に致しましてもよいのであります。

附記 木框又は是に準じました設備のあります場合にはマツバギク、美女櫻、ヘリオトロ

プ、ランタナ、サルビヤ、等の挿木もしてよい時期であります。

五、開花してゐるもの

晴れきつた秋空にもえんばかりに眞赤に咲きほこつて居りますのはサルビヤ、丈高く風情たつぶりにみえますのはコスモス、シオン、などでありませう、やゝ古株になつて偉勢よく茂つた芙蓉、フデバカマ、萩、ス、キの類も今見事であります。その他秋菊に先立つて有禪菊、濱菊の類も見頃になりました。その他カンナ、第二回目のダーリヤなどもなか／＼立派であります。雁來紅ハゲイトウ、ケイトウ、萬壽菊、美女櫻、矢車天人菊、日々草、トレンヤ、猩々草、千日紅、松葉ボタンなど前月に引續きこれまた咲きほこつて居ります。觀葉植物のコリウス、アルタナンセラ、イレシネ、ランタナなどは日一日とその美を増して花におとらぬ眺めであります。

「幸吉の旅」



五

丁度、その時、加藤のお鎌さんは、窓を離れて隣の室に、毛糸のひとかせを取りにいつたところだったので、玄關で案内を乞ふ音に應じて、戸を開けた。開けて見て、まるで、そこに吸ひ付けられたやうに、物も言はずにおつ立つてゐた。先祖の幽霊が現はれて、玄關先に、立ち並んだつてかうも驚きはしなかつたかも知れない。

幸吉は、さつ！と帽子を脱つた。彼は、お鎌さんが、窓の許で、編物をしてゐた時に、その顔をはつきり観なかつたので、もし、観たのだつたら

東京女子高等師範
範學案教授 岡田みづ

とても案内を乞ふ氣にはならなかつたらう。でも、今となつては、もう仕方がなかつた。お鎌さんの冷やかな眼を、ぢつと見詰めて、幸吉は雄々しく、だが、慄へた聲で、

「あのう、このお家で、赤ちゃんは要りませんか。」

と尋ねた。(赤ちゃんが要るかつて！ 何といふ、馬鹿氣た、折に合はない言葉だ！ 赤ちゃんといふものが、例へば、人が生きてるのに入用な空氣かなんぞのように、無くてならない物ではあるまいし！)

お鎌は、返事をしなかつた。彼女は、この場の

有様を説明する何か手掛りがありさうなものだと無理にも心を落ちつけて、考へようとしてゐた。

幸吉は、この婦人は、この家の主婦ではないのだと推定して、庭にあつた大理石の名札（墓石のこと）を幸吉は名札だと思つてゐたので）のことを思ひ出して、

「加藤まさ子といふ人は、この家に居ますか。」と言つてみた。（まあ幸吉つたら！ 何だつて、此の大事な場合に、お鎌さんの心の、痛い所に觸れる氣になつたのだらう！）

「何の用なの。」とお鎌は、吃るやうに言つた。

「僕、誰か この赤ちゃんを貰つてくれる人が欲しいんです。小母さんところに、赤ちゃんが無ければ、ネ、小母さん、こんな可愛い、奇麗な子は、よそにありませんよ。それに冬になれば、雀斑も、さう出来ませんしネ。僕を貰つてくれなくつたつて構はないんです。赤ちゃんの世話をす

る手傳ひに、僕が入用なら、居ますけれど。」

「折角だけれど」とお鎌は、玄關の戸を閉めさうにしながらあてつけがましく考へた。「今日は、赤ちゃんを貰ひたくないから、まあ、御断りしますお前さんだつて、お母さんとこへ早く歸つたら宜いだらう——お母さんがあるんなら、そうして何處に居るんだか分つてゐるなら。」

「でも、僕の母さん——無いんです。」と幸吉は、あてにしてゐた願ひが叶はなくなつたので、思はず悲しくなつて、泣き出してしまつた。この子はいくら、偉いつたつて やつぱり まだ子供なのだつたから。

その途端に、菊嬢が眼を覺まして、幸吉が泣いてゐるなんていふ珍らしい光景を見て、これもワツ！と泣き出した。すると、ポチまでが——なか／＼敏感で、いつもお附合ひに泣く心掛けがある犬なので——毛むくぢやらの頭を振り上げて、泣

きの合奏に加はつて、悲しげな聲をはり揚げた。

さながら、一幅の活人畫が出来たわけだつた。

「お崎や！ お崎！ すぐこゝへ来て、どうかしておくれ！」とお鎌さんが呼び立てた。

呼ばれた女は、縁側から飛んで来た——後ろに赤や、黄や、青の小切れを、長蛇のやうに曳きつづつて。

「あれ、まア」と幸吉の一まきを見渡して、

「一體、どこから来たんだらう。そして、どうしようつていふんだらう。」とその女は言つた。

「この男の子は、赤坊賣らしいんだよ。この赤ツ毛の赤ン坊を、貰つてくれつていふのさ。だけど自分まで貰ふに及ばないつて。どうも家庭が無いと見えるよ。それでね、私が、今赤ン坊は要らないんだつて言つたら、それを聞いて泣き出したの。さうしたら、あとのが真似して泣き出したのさ。この子達は、犬と一緒に 養育院からでも逃

げて来たのかね。精神病者にしては あんまり小さいだらう？」

幸吉は、菊嬢を賺して、よい顔をさせたいばかりに、自分の涙を納めて、後悔したやうに、

「僕つひ泣いちやつて。だつて菊ちゃん、昨夜ツから御煎餅をたべたざりで、何も食べてゐないし、小母さんが明朝まで泊めてくれなければ、寝るところもないんですもの。僕たち、よその家を見んな通り越して、こゝのお家にさめたの。何もかも思つた通りのお家だから。」

「お煎餅ツさき食べないんだつて、まあ！」とお崎は叫んで臺所の方へ往きかけた。

「こゝに居ておくれお崎！ 私一人こゝに置いていつてはいけないよ。近所の人がやつて来て困るしさ。この子供達を臺所へ連れていつて、何か食べさせて ちやり。あとの事は、それからしよう。」

菊嬢は、何か食べるのだと聞いて上元氣になり籠の中から這ひ出ようとして、縁から轉倒げ落ち石段でひどく頭部を打つた。お鎌さんは、兩手で顔をふさいで、子供の泣く聲が起ることゝ身慄ひして、待つてゐた——子供の肉色の靴下と、赤毛の頭部とが中空でこんぐらがつてゐるのが見えたので、併し、菊嬢は、どうやら一人で起き直つて、アハ、と反響するほどの笑聲——世にも賑やかな笑ひ聲を立てゝ笑つた。あ、今のは可笑しかつたと彼女は思つたのだ。かの女の身體には笑ひが一杯入つてゐた——毎日／＼新に材料を仕込むものだから。菊嬢のやうな性質には、「不幸」なんていふものも長く威力をもつ事は出来ないのだつた。菊嬢はお崎に手を曳かれながら「お飯！ お飯」といつて、それから、「あのいやな小母さんは來ないでいよ。」と附け足したが、幸ひにも、解りにくい片言でいつたた

め聞き取れないで終つたのだつた。

お鎌さんは、暗くしてある居間に、よろめき入つて、その黒い長椅子に、身を下ろした。お崎は、陽氣な臺所に、子供達を連れ込んで、

「驚いたね！ ひとりで諸方歩きまはつてさ。大人人の膝位しか背がないのに。この夏は、あんな子供の乞食を澤山稼ぎに出してるのかしら。だが、この家へ來た以上、お腹をすかしては歸さない！」とひとりでぶつ／＼言つてゐた。

さういふわけで、お崎は、パンだのバターだの、バイだの、ミルクだのを多量出して子供達にお腹一ぱいお食べといひ置いてそれからつぶし肉をブリキ皿に入れて物置小屋へもつて行き、ポチを箒で掃き出してそこへ押し入れてからお鎌のゐる室へいつた。

「あなた、何だつて さう怖さうにしてゐるんです。乞食を今まで見た事がないんですか。どうし

たのですよ——私一人で始末が出来ないって 案じていらつしやるのなら、彌平ぢいさんが、やがて戻つて來ますからね。爺さんとお玉は、(馬の名)床に入つて寝るンだと思ふと急ぐ氣になるので、今頃は、さう思つてゐる頃でせう。」

「お崎や、今の男の子がね、眞先まつきに加藤まさ子さんはこの家に居ますかつて訊いたよ。一體どうしたわけだらう？」

お崎も、すつかり仰天してしまつて、

「加藤まさ子がこゝの家に居るかつて？ どうしてまさ子ツて名を知つてるのでせう。きつと誰かよ さう言つて尋ねろツて教へたのですね。そんな事ですよ。別にどうでもないぢやありませんか」
「ひア、どうだかね。あの子が私の顔を見て加藤まさ子さんと言つたら、その途端に、もう心の奥にひそまつてゐて出て來ないだらうと思つてゐた悲しさが、頭を もたげて、まるで昨日の事み

たやうに、私や悲しくなつて來て……

「ま、落ち着きなさいませ。何事もありはしませんよ。」

「でもね。ひよいと、こんな考が出たのだよ。」といつてお鎌は聲をひそめて、

「まさ子の赤ン坊は、ほんとは死んだんぢやないかもしれぬネ。」

「だつてまあ？ 假りに死なゝかつたとしても、まさ子さんが死んでから 二十年の上になりますよ。」

「それは知つてるけれど。その赤ン坊が大きくなつて、今來たやうな子供を置いていつてさ、そしてその子があゝして、たつた一人で世界中を、うろついてゐるのかも知れない。」

「あなた、まあ、随分細かく想像してゐるのですね。もう、いろ／＼考へるのはお止しなさい。まるで、夏、こゝへ避暑に來るお客が讀んでゐる、

安小説みたやうな事を考へていらつしやる。あんな本にはこゝら邊にも、どこの國にも 實際にはありさうもない事件一杯かいてありますね。すこし横になつて 樟腦でも嗅いでいらつしやい。私、あの男の子から きゝ出せるだけいろく聞ひて來ますから。」

.....

加藤のお鎌さんは、本質的に、獨身者もものに出來上つて居たが、お崎は、運が悪ういために 獨りものなのだつた。お崎は、今まで滅多に 子供の可愛い、仕草や、言葉に 接しなかつたのだが、もし、接する機會があつたら、この女は 子供といふものは、たまらなく、可愛いくて、離れられないものだ、と思つたことだらう。

お崎が、臺所へ子供達を連れて行つた時は、敵を絶滅しようと、意氣込んでゐる將軍のやうであつたが、三十分後に臺所から出て來た時には、そ

の覺悟がいつとなしにどこかへ去つてしまつてゐた。かの女は臺所へ入つた時には、たゞ一つ思ひ込んだ目的を持つてゐた女だつたのに、出て來た時は、二心ある外交家になりすまして、煽動と陰謀を、人知れず、その心にひそませてゐた。どうして、さうなつたらうツて？ たゞ軽い何でもない原因が、五つ六つあつたせいなのだつた。まづ幸吉が、お崎の足許の、小さな腰掛に坐つて、お崎の膝に 兩腕をかけ、その澄んだ湖水のやうな眼（幸吉の魂の窓とも云へる）で、お崎の、優しい丈夫さうな顔をじつと見たのが始まりだつた。それから、彼が 身の上話をしてきかせたのだつた。身の上といつても、ぼんやりした、影のやうな、愚痴なんか少しも混らない、談片で、始まなければ、趣向もないし、また終りもないものであつた。それでも、その一語一語が お崎の胸を轟かせたのだつた。

菊嬢は 好きなものを 目敏く知る子なので、早速、お崎の寛い膝ひざの上に攀ち登つてみた。ところが、邪魔にもされなかつたので、お崎の胸のあたりの心地よい凹みに、頭を、ぴつたりはめ込んでしまった。すると、お崎は、子供の柔かい身體からだを抱へてしまつて、そして、いつのまにか、掛けてゐた椅子を ギユ、ギユ、ギユと 前後に ゆすぶるように なつてしまつた！

菊嬢は、世にも満足したといふ風に 大きい溜息を一つして、可愛い、眼を塞いでしまつた。この子は、可愛いがられるのが好きに生れて來たのに、今までは さうした經驗に あまり出遇つてゐなかつたのだ。お崎はその嬉しさうな溜息をさゝ、その花のやうな幼ない顔を見、丸つこい腕うでで柔かく、首の邊りにつかまられてみると、何故かは知らないが、心の中に以前の思出や、新な憧憬が湧き上るのだつた。要するに、お崎は 敵に出

會つて、すつかり捕虜とらへにされてしまつた次第だつた。

やがて、お崎は、菊嬢を、古めかしい長椅子に寝かして、自分は、その傍に陣を取つて、棕櫚の葉の團扇あふぎで、蠅を追拂つてやつてゐた。かの女は幸吉から その不幸な過去、不安な現在、殊に當てのないかれの未來の事を 聞き終つた末、次のやうに言ひ出した。

「もう一つ きゝたい事があるんだよ。それはね お前が 初め、玄關へ來た時に、何だつて、加藏まさ子さんはつて尋ねたの？」

「僕、こゝの家のおかみさんの名だと思つたから。名札にさう書いてありましたよ。」

「だつて、お前、こゝの家には、第一、名札が出てゐないよ。」

「都會まちにある、あの銀色をした、あんなのぢやないけれど、お庭にある白い一理石の板は、名札で

せう？ 加藤まさ子、十七歳 と書いてあつたつ
け。田舎では、庭に、名札を立てたくのかと思
つたんです。たゞね、年齢としを書いて於くのが變だ
なと思つたの。時々、判つて改たはさなくツちやなり
ませんものね。」

「まあ！ この子は！ お墓を知らないの？」と
お崎は絶叫した。

「お墓つて何？」

「まあ！ 一體、お前の知つてゐる事は何だら
う！ 人が埋めてある墓場を見た事ないのかへ？」

「僕は、墓場へ行つた事はないけれど、そのあ
る所を知つてゐます。人が埋められるのも知つて
ゐます。お房は埋められることになつてゐまし
た。ぢや、あの白い石は、人が中に埋まつてゐて、
何ていふ人だつて事が書いてあるんですね。する
と、やつぱり、名札みたいなもんでせう？ 加藤
まさ子、十七歳ツて誰ですか。」

「その人はね、お鎌さんの妹で、都會まちへ行つて、
それから、この田舎へ歸つて来て、昔死んぢまつ
たの。お鎌さんは、まささんを大事に思つてゐて
ね、人がその名をいつてもいやがりなざるから、
よく覚えてゐいでよ。——そのお房さんといふ人
は、若い人だつたの？」

「若いか、どうだの、僕には分らない。」と幸吉は
當惑して「黄色いような髪で、白い齒をしてゐた
けれど、咽喉のどのところは、この小母さんみたいに
皮がぱり／＼だつた。菊ちゃんみたいに柔なでな
かつたな。」

「まあ、いゝサ。では、暫くここにゐいでよ。そ
してあの犬が引搔くのを止さない内は中へ入れち
やいけないよ——一生引搔いてゐてもかまはない
から。あの犬は行儀がわるくてしようがない。こ
れから私は、お鎌さんとこへいつて、話して来る
から。お前達を一晚泊めてやると言ひなざるか、

どうだか、さつぱり私には分らない。お前、はじめの「出」がわるかつたんだもの。

六

お崎は、お鎌の居間に入つていつて、幸吉にきいた話を、すつかり話した。この女は、言葉を飾つて話すたちでないから、簡単に、あつさりと話して、お鎌の返事を待つた。

「どうしたもんだらうね。」とお鎌さんは、心配らしく、尋ねて。

「どうも、私が指圖するわけには行きませせん。私の家ぢやないし、寢台だつて、食べ物だつて、私のものでないから、でもね、神信心をしてゐながら、あの子供達を、追出すなんて、無慈悲な事は出来ませぬ。かうして、暗くはなつてくるし、あの子達は寝るところはないしするのですから。」
「うちのまさ子が、悲しい目に遇つてた頃に、立

派な信心家が、かまひ付けてやらなかつたよ」

「それア、信心家にだつて、無情者こころなしはありますけれど。それだからつて、私達が、その眞似をするには當らないでせう。」

「知りもしない子供を二人も引受けて、幾日も、いや一月も二月も、背負ひ込む等はない。」とお鎌さんは冷淡にいつて「ぢや、かうしよう。男の子を、植田さんへ遣らう。草刈りの時節に近いから雇ひ入れて何かの手傳ひをさせるかも知れない。さうして、あの子には、この近所で働く口があるなら、赤ん坊だけは預つてやると言はう。その内に、あの子達を遣る場所を見附けたり、その言ふことが、眞實だか、どうだか、探さぐり出すことも出来るから。」

「で、もし植田さんで、雇はないつて言ひなすつたら？」

と、お崎は、なるだけ、無頓着な態ていを装つて、尋

ねた。

「さうしたら、こゝへ戻つて来て、こゝに泊るよ
り、しようがないぢやないか。私がいつてさう言
つてやりませう。私や、何だか、長く病氣に罹つ
てたあと見たやうに、力が無くて。」

幸吉は、お崎が心配した程でもなく、おとなし
く承知した。植田さんの農場は、さう遠くもなさ
うだし、菊嬢の事は、案じないでもよくなつた
し、自分だけなら、どこかに寝るところはあるだ
らう。養育院とか何とか院なんて家でさへなけれ
ば、どこだつていゝ。と、幸吉は考へたのだつた。

幸吉が帽子を手にして出掛けようとした時に、
お鎌さんは、氣がゝりらしく、

「赤ン坊が、目を覺まして、お前が居ないのを知
つたら、どうするだらうね。」と訊いた。

「僕にもよく分らない。」と幸吉は答へた。「今まで
は、いつも一緒に居ましたから。だけど、大概大

丈夫でせう。小母さんに少し馴れてゐるし、僕が
毎日遇ひに来れば、菊ちやんは、滅多に泣きませ
んよ。どうかして癩癩を起すすと、たまに泣くけ
れど。でも、こつちで、氣を付けてチャンとして
ぬれば、怒つたりしません。」

お鎌さんは、お崎の方を凄いやうな眼で、ちら
と見て

「フーン、赤ン坑の方がチャンとしてゐる筈ぢや
ないか」と言つた。

幸吉は、野を斜にすに植田さんの家へ、行く途を教
はつた。お崎は、裏門まで、幸吉について行つて
ソツと、ドウナツを三つ渡してやつた。表面は、
草地に干してあつた、手拭や、ナフキンを取り入
れる風にして、幸吉の姿が見えなくなるまで、見
送つてゐた。

.....

その晩、九時頃に、もう眞暗まっくらになつてから、幸

吉は、こつそり加藤の家の門のところへやつて来た。植田さんの家へ、いそぐ、と十町あまりも歩いていつた。その足を、彼は大儀さうに、曳きづつて戻つて来たのだつた。「望み」といふ鞋を穿いて歩くのと、「失望」といふ重い靴を曳きづつて歩くのとは、大層な相違だつたから。

幸吉は、白い小門に倚りかゝつて、蛙の聲を聴いたり、草の中で、あちらこちらに、光つてゐる螢を眺めたりしてゐたが、靜かに、家の横手に廻つて、お崎に取りなして貰つて、あの怖い小母さんの前へ出ようと考へたのだつた。彼は、音をさせないように、戸をあけて入つた。すると、困つたことに、その怖いお鎌さんが。その卓の上に洗濯したものをひろげて、水をふりかけてゐた。

ちよつとの間、雙方無言でゐた。それから幸吉は卒直に

「あすこの家で、僕を雇つてくれませんかです。ま

だ小さくて役に立たないツて。菊ちやんを要らないツて言ふんです。僕、もうひとに厄介をかけないでこゝの長椅子に寝る方がいゝと思ふ。」と言つた。

「そんな事しないでもいゝよ。」とお鎌さんは、威勢よく應じて、「よく歸つて来ておくれだ。泊り賃位、すぐ稼げる。ソレ、あの聲がさこえるならう。」といつて、二階に通じる廊下の戸を開けた。

なるほど、泣き叫ぶ聲が、臺所まで傳はつて来た。續いて、また、一と聲、次にまた一と聲！ 幸吉の身體中の血が、のこらず、その青白い顔に昇つて来た。彼は、口をキリツと結んで

「菊ちやんが打擲たれてゐるのですか。」と訊いた。「いゝえ。打つてやつてもいゝ位なんだけれど、私達はそんな亂暴はしないよ。あの子は、お前が言つた通り、疳癩持ちなんだね。大方こつちがチヤンとしなかつたんだらうよ。」

「僕、行つて見てようござんすか。僕の顔を見れば、黙だまるでせう。あの子が寝るとき僕が居ない事がないもんだから。あの子はほんとにちつとも、怒りほくないんです。」

「いゝとも〜。あの子がこゝに居る間は、お前も居てもらはう。ほんとにまあ！ 近所の人は、うちで豚を殺してゐると思ふだらう。」

と言ひながら、お鎌さんは、先へ立つて、幸吉を二階へ案内していつた。

菊嬢は、床こゝろの上に起き上つてゐて、子煩惱のお崎が、傍そばに坐つて、林檎りんごだの、お菓子だの、繪入りの聖書だの、寒暖計だの、玉蜀黍とうもろこしの穂だの、剝製はくせいにした青い鳥（お客間の飾棚の誇りなのだが）を膝ひざに擴ひろげてゐた。

しかし、そんな御機嫌ごきげんとりの品物は、何の効力もなかつた。いくら宥なだめ賺うさうとしても、菊嬢は「兄ちゃん！ 兄ちゃん！」といつて訴へるばかりだつた。

そこで、今、なつかしい幸吉の姿を見ると、かの女は貴重な鳥を、室の隅へと放り投げて、狂喜して、幸吉の腕うでに縋すがりついてしまつた。

それから十五分経つたら、四邊あたりが森しんとしてしまつた。お崎は、居間へ入つて、揺り椅子ゆりいすにどかりと腰を下ろして

「あ！ すつかり上氣のほせてしまつた。」と言ひ〜前掛まへかで顔を拭ぬいたり、扇あふいだりした。

「夕方、五時ごろには、私も、太一郎さんところへ嫁よめかなかつたのを残念だと思つたけれど、今は、嫁よめかないでよかつたと思ふ。だけれど、（青い鳥の羽毛はねがもしや〜になつたのを、撫なで、平へらにして、硝子箱硝子箱の中へ戻かへしながら）子供は、可愛い〜。」

「子供にも、まるで野良猫ねこみたようなのがゐる。」

とお鎌さんは、一言答へた。

「そんな事いつて、一寸二階へ行つてどこが野良猫ねこみた様ようだか見ていらつしやい。まあ、とに角かく、こんな夜更よるけに、あの子達こどもたちを追出おしだすなんて事は、神様

にすまないわけです。神様が、私達にッて、定めな
すつた仕事なら、何とかして果さなくツちや。」

「もつと別の仕事の方がいゝ。」

「それは、そうです！ 誰だつて、自分の好きな仕
事をしたと思ひますさ。でも、自分達がしたい
と思ふ事をするのぢや、神様の課しなざる仕事と
はいへないわけです——あら！ 何の音でせう。」

錫の鍊が落ちる音がした。お崎は、その原因を
調べに飛んでいつた。十分程して、以前より、も
つと、暑さうな顔をして、戻つて来て、再、揺り
椅子に腰を下ろした。

「あの犬のお蔭で、驅けまはらせられてさ！ あ
いつが、物置の中で、ガリ／＼バリ／＼やるから
仕方なしに、薪置場へ入れたんですよ。さうした
ら、あそこに置いてある臺に登つて、頂邊にある
小窓を押し明けて、牛乳鍋の載せてある棚の上に
降りて、鍋をみんな落として、トマトの罐をみん

な、ひつくりかへてしまつたんです。それでゐて
どこに居るのだから、姿がちつとも見えないと思つ
たら、床に泥の跡が付いてゐたので分つたんです
が、蚊除けの網戸を蹴き／＼通り抜けて、家の中
に入つたんです。それからとは、何處にゐるか
大抵想像がつかますわね。二階ヘソツといつてみ
ると、案のじようあの子供達二人の間に、ちんと
納まつて、眠つてゐるぢやありませんか。私が入
つていつたら、海賊みたいな聲を出して躰をか
いてゐたのですがね、燈火を點けて、寢臺のところに
立つて見てゐたら、あいつ、眼を大きく明いてゐる
んですもの。眠むつてゐる振りをしてゐれば、そ
のまゝにして置いて貰へるかと思つたんでせう。
私は、ぐいと引張つて、連れ出して、古い鶏小屋へ
入れて置きましたから、朝まで、そこに居るでせ
う。ほんとの血續きでも何でもないのに、あの男
の子と赤ん坊みたように、あんなにも仲の良い同
士を、私や、見た事がありませんよ。」(つづく)

定規文注 告 稟

- 一、幼稚園及び小學校、家庭、育児、看護等に關する論說調査研究等の寄稿を歓迎いたします。
 - 一、寄稿は一行二十四字詰に記して下さい。但改行は一字下げること、また句讀點は一字あけること。
 - 一、寄稿並に本誌の編輯に關する通信、紹介及び寄贈の新刊書、交換雜誌、入會手續、更に
 - 一、本誌の購讀及び廣告に關する通信並に照會等一切左記編輯兼發行所宛に願ひます。
- 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内**
- 日本幼稚園協會**
- 一、本誌御注文の方は凡て前金（郵税非）で願ひます。（郵券代用の場合には總て一割増）
 - 一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。
 - 一、送金の節には第何卷第何月號より第何月號迄と明記せられたし。
 - 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しませせん。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。
 - 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。
 - 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

價 定	
一ヶ月分一冊	金參拾五錢 送料壹錢
半ヶ年分六冊	金貳圓拾錢 送料共
一ヶ年拾貳冊	金四圓貳拾錢 送料共

（外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい）

昭和五年十月十二日印刷納本
昭和五年十月十五日發行
幼兒の教育 第三十卷第九號

不 許 復 製
禁 轉 載

編輯兼發行者 堀 七 藏
東京府豊多摩郡戸塚町大字戸塚五七五
印刷者 須 藤 紋 一
東京市麹町區飯田町二丁目五十番地
印刷所 京華社印刷所

發行所 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内
日本幼稚園協會
振替口座東京一七二六六番

告 廣	
特等面一頁 金參拾圓	二等面一頁 金貳拾圓
一等面一頁 金貳拾五圓	一頁以下御斷

神田區南甲賀町八品田真松に御申込下さい。

東京美術
學校教授

小林萬吾・中村亮平共著

菊判全一冊洋綴原色版圖四葉コロタイプ
四葉、定價金三圓三十錢、送料金十八錢

新刊

參考世界美術讀本

西洋篇

美術の鑑賞
と教育の
大書
と美術の
大書
と美術の
大書

人類文化の一面を燦かに彩れる美術の鑑賞が教育の情操方面に寄與する効果は實に偉大なものである。併し美術の期待する所である。深く其の全般に於て、古代の希臘、羅馬、初期の美術より近代及現代の思潮を述べて一々其作風、傾向、代表、彫刻、西班、牙、アルタミラの洞窟壁畫の各時代を經てルネッサンスに至り次でパロツク、ロココの美術を擧げ、且つ建築美術にも及ぶ。本書一卷に於て、克く歐洲美術の概観を系統的に明白に興味深く紹介す。教育家の乞必讀。

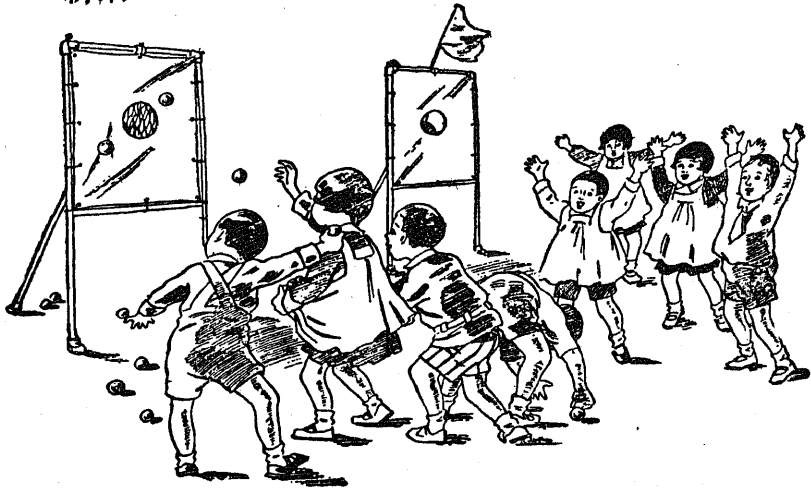
帝國美術學院會員
東京美術學校教授
岡田三郎助
丹羽禮介
共著

新刊 學校家庭 萬有圖畫全集 描き方	五版 學校家庭 應用圖案畫集 描き方	六版 學校家庭 クレヨン畫集 描き方	三版 學校家庭 應用略畫集 描き方	新刊 學校家庭 圖畫描き方 基本
菊判全一冊洋綴 定價三圓八錢 送料二十七錢	菊判全一冊洋綴 定價三圓八十錢 送料十八錢	菊判全一冊洋綴 定價三圓八十錢 送料十八錢	菊判全一冊洋綴 定價三圓八十錢 送料十八錢	菊判全一冊洋綴 定價三圓五十錢 送料十八錢
小學校各學年の各學科、圖畫、國史、理科、 地理等に取用し、且つ製作家たるを得。	勿論ホスマー、表紙、裝飾、染物、編物等、 圖案の作意を會得し、且つ製作家たるを得。	一本の線より順序を経て畫に成る迄即ち素描 と彩色の過程を學校教育に實例に於て説明し てあり、且つ學校教育に實例に於て説明し	實物寫真と寫生圖と略畫の三様の比較を如實 に示す等、用意周到、懇切丁寧を極めた教育 略畫集の寶庫であり、指導書であります。	作畫の第一階梯として一圓型、二、三角型 三、四角型の之等の配置交錯に依り如何に簡 單に描かるゝかを兒童に會得せしめるに努む

發行所 東京市牛込區 中野區 文庫館書店 電話 東替 牛東 三三八 三二四 三五七 番番

新案バスケットボール

新案バスケットボール



定價 二十八圓

昭和四年五月十五日第 種郵便物認可
(毎月一回十五日發行)

昭和五年十月十二日印刷納本
昭和五年十月十五日發行

運動會のシーズンになりました

秋暗れのすがくしい運動會のシーズンが参りました。運動具御用意の御参考に左記の品々を御紹介申上げます。御用命の程お待ち申上げます。

(品 種)	(定 價)	(當社カタログ頁數)
バスケットボール	金二十圓	六〇頁
新案バスケットボール	金二十八圓	六一頁
投 輪	金六圓	六五頁
フットボール	金七圓	
行進タンク	金十五圓	
運動帽	金二十錢	七四頁
飛び輪	金四十錢	
潜り輪	金二十八錢	
鈴 輪	金三十錢	
樂隊用具	金二十圓	四一頁

【本月中の御注文に限り荷造送料特に割引致します】

製造發賣元

東京・神田・一橋通(教育會館内)

株式會社 フレーベル館

電話九段(御注文用)三八二七
三四八・三六三・三六三
振替東京一九六四〇

定價 三十五錢